タル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムヿヲ得ス

第二章　起訴

第一節　檢察官ノ起訴

第百七條　檢事犯罪ノ搜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ムル可シ

二輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第百八條　前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第百九條　檢事豫審ヲ求ムル時ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逃捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第二節　民事原告人ノ起訴

第百十條　重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第百十一條　被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヿヲ得

第百十二條　被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スヿヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章　豫審

第百十三條　現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルヿヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第百十四條　豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ

被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第百十五條　豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヿヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日內ニ檢事起訴ヲ爲サヽル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルヿナカル可シ

第百十六條　被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヿヲ得

第百十七條　檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヿヲ得但二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヿヲ得

第一節　令狀

第百十八條　豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出廷ノ日ヲ過クルヿヲ得ス

第百十九條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地內ニ住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルヿヲ得

第百二十條　豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

第百二十一條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得

一　被告人定マリタル住所アラサル時

二　被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時

三　被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時

第百二十二條　勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時內ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

第百二十三條　勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヿヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾

十四年第五十九號布告（本欽六項）十五年司法省丙第二十號（同七項）參考

留シ速ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第百二十四條　前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヿヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第百二十五條　豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヿヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第百二十六條　勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十七條　豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルヿナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヿヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第百二十八條　收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヿヲ得ス

第百二十九條　收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模樣アル時ハ其概畧

二其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條

三檢察官ノ意見ヲ聽キタルヿ

第百三十條　總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

勾引狀勾留狀收監狀ハ巡査ヲシテ之ヲ執行セシム

第百三十一條　召喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第百三十二條　勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査數人ニ分付スルヿアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第百三十三條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戶長又其差支アル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

巡査ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス捜索調書ヲ作リ立會人ト共ニ署名捺印スヲ可シ

家宅捜索ハ日出前日沒後之ヲ爲スヿヲ得ス

第百三十四條　豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヿヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡査ニ令狀ヲ帶行セシムルヿヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ムヿヲ可シ

第百三十五條　豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スルヿヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第百三十六條　陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時ハ所屬長官ニ令狀ヲ示ス可シ長官ハ已ムヿヲ得サル差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦同シ

第百三十七條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監倉ニ引致ス可シ若シ其監倉ニ引致スルヿ能ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルヿヲ得

何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第百三十八條　令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡査ハ之ヲ執行シタルヿ又執行スルヿ能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載ス可シ

巡査ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取證書ヲ渡ス可シ

第百三十九條　勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若クハ獄舍ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及ヒ謄本ニ記載ス可シ

第百四十條　密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルヿヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人トノ之ヲ授受スルヿヲ許サス但豫審判事ハ其書類ヲ留置クヿヲ得

第百四十一條　豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第百四十二條　監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

第二節　密室監禁

第百四十三條　豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第百四十四條　密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允

許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヿヲ許サス
食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第百四十五條　密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヿヲ得
言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ
豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節　證據

第百四十六條　法律ニ於テハ被告事件ノ模樣ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヿナシ
被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第百四十七條　豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第百四十八條　豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ
裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヿ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

十六年第八號布告（本款三十九項）參看

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質

第百四十九條　豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第百五十條　豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス

第百五十一條　書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ
豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヿヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第百五十二條　被告人其陳述ニ付キ變更增減ス可キヿヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第百五十三條　被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヿヲ得

第百五十四條　豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヿ人違ナキヿ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模樣ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヿヲ得

第百五十五條　書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第百五十一條第百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百五十六條　被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第百五十七條　通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百九十二條第百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節　檢證及ヒ物件差押

第百五十八條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第百五十九條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヿヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第百六十條　豫審判事ハ臨檢ノ場合ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模樣ニ因リ被告人ノ人違ナキヿヲ又ハ犯罪ノ模樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第百六十一條　豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヿヲ得

第百六十二條　豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヿヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戶長ノ立會アルヲ要ス

第百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十三條　被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヿヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヿヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヿヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第百六十四條　家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第百六十五條　豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第百六十六條　豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヿヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百六十七條　豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヿヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヿヲ得

第百六十八條　豫審判事ハ其管轄地內ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヿヲ得

第百六十九條　豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヿヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節　證人訊問

第百七十條　豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヿヲ得

第百七十一條　證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第百七十二條　豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヿヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第百七十三條　呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルヿアル可キ旨ヲ記載

ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第百七十四條　證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヿヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第百七十五條　證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キヿヲ認可シ又ハ職務上已ムヿヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百七十六條　豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヿヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

第百七十七條　豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルヿ其呼出狀第百七十三條ノ規則ニ背キタルヿ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサリシヿヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第百七十八條　證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヿヲ證明ス可シ

第百七十九條　豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齡職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條　豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヿヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添綴ス可シ

第百八十一條　左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヿヲ許サス但事實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヿヲ得

一　民事原告人

二　民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三　民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者

四　民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第百八十二條　左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一　十六歲未滿ノ幼者

二　知覺精神ノ不充分ナル者

三瘖啞者
四公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者
五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者
六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免許ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條　證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事撿事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

第百八十四條　證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヿヲ得

第百八十五條　豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヿヲ得
若シ證人同行スルヿヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條　第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條　皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條　書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ
其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヿ又ハ爲サヽルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條　豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ
證人ハ其陳述ヲ變更增減センヿヲ請求スルヿヲ得書記ハ其請求アリタルヿ及ヒ變更增減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヿ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條　證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヿヲ得
若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルコトヲ得
本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節　鑑定

第百九十一條　豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヿヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

十五年司法省丙第二十五號達（第二百八十八ノ一項）參看

第百九十二條　鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヿ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヿヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヿヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條　鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヿヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ

第百九十四條　鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事撿事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第百九十五條　第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルヿヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヿヲ得

第百九十六條　豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第百九十七條　豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ增加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヿヲ得

第百九十八條　鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記スヘシ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第百九十九條　鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ撿印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條　鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第八節　現行犯ノ豫審

第二百一條　豫審判事ハ撿事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ撿事ノ請求ヲ待タス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヿヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨撿シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第二百二條　前條ノ場合ニ於テハ撿事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事撿事調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヿヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ撿事ニ送致ス可シ但撿事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サル

ノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條　檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヿヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヿナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヿヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヿナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條　前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條　第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヿヲ得但令狀ヲ發スルヿヲ得ス

十四年第四十六號布告（本款一項）參看

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條　檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時內ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作リ勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條　豫審判事ハ二十四時內ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヿヲ得

第二百八條　豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヿヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

十五年第五十三號布告（本款五項）參看

同上

第二百九條　檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヿヲ得

十六年司法省丙第八號達（本款七十項）ヲ以テ保釋賞付中取締方ヲ定ム

第九節　保釋

第二百十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヿヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第二百十一條　前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條　保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條　保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地內ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヿヲ得

第二百十四條　保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ沒入ス可シ

第二百十五條　保證金ヲ沒入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシ

第二百十六條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヿヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條　豫審判事保證金ヲ沒入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ沒入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條　豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條　豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヿヲ得

第十節　豫審終結

第二百二十條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヿナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條　檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヿヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時內ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條　豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條　豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヿヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ

若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一犯罪ノ證憑充分ナラサル時

二被告事件罪ト爲ラサル時

三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四確定裁判ヲ經タル時

五大赦アリタル時

六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百二十五條　被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條　被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スヿヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヿヲ得

第二百二十七條　被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヿヲ記載ス可シ

第二百二十八條　豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其原由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヿ公訴受理ス可カラサルヿ及ヒ其原由又犯

罪ノ證憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條　前條ノ言渡書ニハ第百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條　書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十一條　被告人ヲ逮捕スルヿ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第二百三十二條　前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヿヲ民事裁判所ニ請求スルヿヲ得

第二百三十三條　豫審終結ノ言渡ヲ爲タシル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章　豫審上訴

第二百三十四條　左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得

一管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時
二法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時
三法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サヽル時
四越權ノ處分アル時
民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スヿヲ得

第二百三十五條　故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出ス可シ
故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日內ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得
故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條　故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ
會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スヿヲ得

第二百三十七條　左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヿヲ得
一豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
三豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條　忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時內ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルヿヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條　豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スヿヲ得
會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第二百四十條　豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スヿヲ得ス
又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルヿヲ得

第二百四十一條　會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スヿヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十二條　豫審判事自ヲ第二百三十七條ニ定メタル原由アルヿヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決スヘシ

第二百四十三條　會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スヿヲ得

第二百四十四條　書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヿヲ得

第二百四十五條　檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルヿヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルヿヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立ヲ許否ス可シ

第二百四十六條　檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第二百四十七條　故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス、

第二百四十八條　檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日內ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日內ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百四十九條　故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヿヲ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日內ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第二百五十條　豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限內又故障アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條　書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出ス可シ

第二百五十二條　會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百五十三條　會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ

第二百五十四條　會議局ニ於テ故障ノ取調中管轉違越權又ハ公訴受理スヿカラサルヿヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消スヿヲ得

第二百五十五條　會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者アルヿ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルヿヲ發見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシムル可シ

檢事ハ意見書ヲ差出スヿ可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決スヿ可シ

第二百五十六條　故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達スヿ可シ

第二百五十七條　檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第二百五十八條　被告人ニ送達スヿ可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スルヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ記載スヿ可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フヿナカル可シ

第二百五十九條　第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致スヿ可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命スヿ可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲スヿ可シ

第二百六十一條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルヿナカル可シ但新ナル證憑アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル證憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許スヿヤ否ヲ判決スヿ可シ

第四編　公判

第一章　通則

第二百六十二條　訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付スヿ可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルヿヲ得

第二百六十三條　重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行スヿ否ラサル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第二百六十四條　被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルヿヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許スヿ可シ

第二百六十五條　被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルヿナシ但守卒ヲ置クヿアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルヿヲ得若シ出廷シテ辯論スルヿヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條　被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルヿヲ得

辯護人ハ裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代言人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スヿヲ得

第二百六十七條　被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スルヿヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヿ能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヿナク裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カラス

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヿ能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戶長ニ送達ス可シ

第二百七十條　闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルヿヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルヿ能ハサルノ事由ヲ證明スルヿヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得

第二百七十三條　公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

第二百七十七條　檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

第二百七十八條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條　檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヿヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條　忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條　裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調

書說明ノ爲メ之ヲ呼出スヿヲ得

第二百八十六條　豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サヽル時證人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較スヿヲ得キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヿヲ得

第二百八十七條　第百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接スヿヲ得カラス又陳述前辯論ニ立會フヿヲ得カラス

第二百八十九條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問スヿヲ得

一　檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二　民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三　被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條　證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問スヿヲ得但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第二百九十一條　證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヿヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヿヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問スヿヲ得キヿヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條　證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致スヿヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致スヿヲ可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヿヲ得

第二百九十三條　證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡スヿヲ可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一　違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二　輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡スヿヲ可カラス

第二百九十四條　前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達スヿヲ可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日內ニ出廷スルヿヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消スヿヲ可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲スヿヲ可シ

第二百九十五條　證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サヽル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條　證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條　第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ說明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條　被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條　被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第三百條　證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヿヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スヿヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條　檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條　辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三條　民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヿヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヿヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條　無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヿヲ明示ス可シ

第三百六條　裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヿヲ得

第三百七條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ

幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條　本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限內又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條　禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第三百十一條　勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條　訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルヿヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限內ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條　書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日內ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可

十四年司法省甲第七號布達（本款五十一項）同年同省第三十一號（同丁項）達（同五十二號同丙項）達（同五十五年第十二號同四號）參看

キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條　裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ求ムルヿヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時內ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條　對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條　書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一　裁判ヲ公行シタルヿ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヿ及ヒ其事由

二　被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三　證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヿ若シ宣誓ヲ爲サヽル時ハ其事由

四　原被ノ證據物件

五　辯論中異議ノ申立アリタルヿ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヿ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六　辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ陳言セシメタルヿ

第三百十八條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ渉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヿヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條　公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日內ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條　裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章　違警罪公判

第三百二十一條　違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二　豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條　呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サヽル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

第三百二十三條　呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條　違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヿヲ得

第三百二十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ

於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百二十六條　書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條　違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條　違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條　被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヿヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條　呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日內ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條　裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルヿ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百三十條マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三十五條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條　被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條　被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所

檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヿヲ得

第三百三十八條　違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ヒ民事搭當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條　控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日內又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日內トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

第三百四十條　訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條　控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條　控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヿヲ得

但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヿヲ得

第三百四十三條　控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヿヲ得ス

第三百四十四條　控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヿヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條　第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條　檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第三章　輕罪公判

第三百四十七條　輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス
一　檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
二　豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡
第三百四十八條　呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ
第三百四十九條　被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ
民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得
第三百五十條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
第三百五十一條　第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス
第三百五十二條　檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ
民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ
調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ
被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ
第三百五十三條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スヿヲ得
第三百五十四條　罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヿヲ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ
第三百五十五條　闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス
第三百五十六條　闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヿヲ得
一　被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時
二　裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時
三　被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヿヲ知リタルノ證アル時
第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヿヲ知リタルヨリ三日內ニ故障ヲ爲スヿヲ得
第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヿヲ知リタルヨリ三日內ニ故障ヲ爲スヿヲ得
第三百五十七條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヿヲ得
但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ
又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其

報告書ヲ差出サシムルヿヲ得

第三百五十八條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條　被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條　被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條　被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條　會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルヿナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條　前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテハ檢察官ノ請求ニ

十八年第二號布告（本欵六十六項）參看

因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スヿヲ得

第三百六十四條　被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第三百六十五條　檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スヿヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スヿヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條　公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時

ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條　第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條　控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四章　重罪公判

第三百七十二條　重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定ヘタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシムヘシ

第三百七十四條　公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模樣

二被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地

三豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ概畧

第三百七十五條　公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條　重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヿヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得

第三百七十七條　書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

十四年司法省第八號布達（第二百七十四項）ヲ以テ大審院諸裁判所及代言人規則ヲ定ム

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條　重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且ツ辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ナシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヿヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヿヲ得ス

第三百七十九條　辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立クル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條　書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヿヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條　辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヿアリト雖モ辯論ニ取掛ル前

十五年第一號布告（本欄六十八項）參看

ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヿヲ得ス

第三百八十二條　辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヿヲ得又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルヿヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條　檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限內ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條　前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヿヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキヿヲ申立クル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百八十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條　裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス可キヿヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條　裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スヿヲ得

第三百八十八條　裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條　書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼出ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條　裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條　裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サヽル可カラス

第三百九十二條　裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條　裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條　證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラズ

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヿヲ又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヿヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第三百九十五條　裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲スヿヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヿヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條　裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヿヲ言渡ス可シ

第三百九十七條　檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヿヲ得

裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條　辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述スシ可

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヿヲ辯論スルヿヲ得

第三百九十九條　前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヿヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヿヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條　被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條　辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ナシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條　檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百四條　闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヿヲ得

第四百五條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條　闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヿヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百七條　闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日內ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條　故障ノ中立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條　闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第一章　上告

第四百十條　檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヿヲ得

一　法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二　裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三　法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四　法律ニ於テ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無效ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五　法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六　法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七　裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヿヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八　裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九　事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十　擬律ノ錯誤アル時

十一　越權ノ處分アル時

第四百十一條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヿ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヿヲ得ス

第四百十二條　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十三條　上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十四條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條　豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條　上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時內ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條　上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日內ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條　對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日內ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條　檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條　書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヿヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條　上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヿヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條　院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

第四百二十三條　上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヿヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條　書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條　開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條　上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サヽル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條　大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條　大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條　擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヿニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヿナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條　豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヿアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサヽル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條　豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言

渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條　大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條　大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條　法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百三十五條　法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期內ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スヿヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條　左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヿヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サヽル時

三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條　哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日內ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日內ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限內ニ其答辯書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ス可シ

第四百三十八條　大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章　再審ノ訴

第四百三十九條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スヿヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルヿヲ說明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ僞造又ハ錯誤アルヿヲ證明シタル時

第四百四十條　再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スヿヲ得

第四百四十二條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條　大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條　大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條　大審院ニ於テ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴

及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヿヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ

其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヿヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナシ原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條　再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ掲示公告ス可シ

第三章　裁判管轄

第四百四十八條　通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訟訴事件ヲ管理スルヿ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヿヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヿヲ得

第四百四十九條　裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條　大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條　犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十二條　公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條　大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヿナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條　被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模樣ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヿ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十五條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヿヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第四百五十六條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日內ニ答辯書ヲ差出スヿヲ得

第四百五十七條　大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編　裁判執行復權及ヒ特赦

第一章　裁判執行

第四百五十九條　重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條　死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ」司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日內ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條　刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條　死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條　裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作リ左ノ條件ヲ記載スヘシ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二罪名刑名

三再犯

四裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條　既決犯罪表ハ二通ヲ作リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作リ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヿヲ認定スルヿ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヿヲ得

第四百六十八條　前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條　賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章　復權

第四百七十條　復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條　復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一裁判言渡書ノ謄本

二主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヿヲ證明スル書類

三假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條　檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條　檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之

ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條　司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條　勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スヿヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條　復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章　特赦

第四百七十七條　特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヿヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第四百七十八條　司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヿヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條　特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條　特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

〔一〕治罪法中書類送達以下七項施行方　明治十四年九月二十日　布告第四拾六號

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ內ハ不及其儀候事

○

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ內犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

○

治罪法第七拾三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ內二名ト相定候事

○

治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其擧動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分

治罪法第廿四條參看

同第四十條參看

同第七十三條參看

同第百壹條參看

ノ内現行犯ニ准シ處分スルヿヲ得

○

治罪法第百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日沒後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸座敷ハ日出前日沒後ニ拘ハラス搜索致シ苦シカラス

同第百三十三條參看

○

治罪法第百六十八條第百七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヿヲ許シタル處分ハ當分ノ內其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヿヲ得

同第百六十八條第百七十二條參看

○

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヿヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ內現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

同第二百五條參看

〔二〕監倉若クハ獄舍ニ在ル被告人ヘ書類送達方 明治十六年七月十四日 司法省達丙第四號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

監倉若クハ獄舍ニ在ル被告人ヘ送達スヘキ源テノ書類ハ裁判所ヨリ監獄署ヘ送達の手續ヲ囑托シ該署ニ於テハ規則ニ從ヒ本人ニ送達シ令狀ハ其正本其他ハ送達書ノ一本ヲ裁判所ヘ返還スヘキ樣取計ベシ此旨相達候事

但從前ノ指令內訓本文ニ牴觸スル條件ハ源テ取消候事

〔三〕樺戸及空知集治監ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル時司獄官ヘ囑託スルヲ得 明治十五年十二月十三日 司法省達丙第三十四號大審院裁判所府縣（東京府ヲ除ク）

樺戸及空知ノ集治監ニ拘禁中ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル等ノ事アレハ本年第拾六號同第四十壹號公布ノ趣モ有之ニ付該監司獄官ヘ囑託スルヲ得ヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

治罪法第十九條參看

〔四〕治罪法第十九條海上路程猶豫ノ割合 明治十五年二月一日 布告第七號

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

右奉　勅旨布告候事

治罪法第二百六條參看

〔五〕現行犯訊問時間五日內ニ於テスルコトヲ得 明治十五年十一月十三日 布告第五拾三號

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時內ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ內五日以內ニ於テスルコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

治罪法第二百六條參看

〔六〕豫審判事ノ勾引セシメタル被告人留置方 明治十四年十月八日 布告第五拾九處

治罪法第二百七條參看

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

治罪法第百廿二條參看

〔七〕治罪法ニ定メタル勾引狀ノ期限ハ休暇日ヲ算入セス 明治十五年二月六日 司法省達丙第四號裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

沖繩縣

治罪法ニ定メタル勾引狀ノ期限ニハ總テ休暇ノ日ヲ算入ス可カラス但平常休暇ナキ官署ニ付テハ此例ヲ用ヰサル儀ト可心得此旨相達候事

治罪法第百廿二條參看

治罪法第五十二條參看

〔八〕治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ輕罪裁判ヲ爲スノ手續等　明治十四年十月六日　布告第五拾四號

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スヿヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

治罪法第七十條參看

〔九〕治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時警部檢事ノ職務ヲ代理ス　明治十四年十二月二十八日　布告第七拾壹號

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在地ノ警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

右奉　勅旨布告候事

〔十〕重罪裁判所管轄ハ始審裁判所管内ヲ以テ一區劃ト定ム　明治十六年九月七日　布告第三拾三號

明治十四年十二月　第七拾八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始審裁判所管内ヲ以テ一區劃ト定メ各其地名ヲ冒シ某重罪裁判所ト名稱ス

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ從前ノ通

右奉　勅旨布告候事

治罪法第七十條參看

〔十一〕樺戸空知兩集治監ノ囚人重罪ヲ犯シタル者札幌始審裁判所ニ於テ處分ス　明治十六年十一月十日　布告第三拾八號

樺戸空知兩集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五年六月第三拾號布告ニ準シ處分スヘシ

右奉　勅旨布告候事

治罪法第七十三條參看

〔十二〕札幌根室始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク　明治十八年十月廿二日　布告第三拾三號

自今札幌根室始審裁判所ニ於重罪裁判所ヲ開ク但治罪ノ手續ハ當分ノ内便宜取計フヘシ

右奉　勅旨布告候事

〔十三〕始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開クトキ其所長ヲ裁判長ト爲スヿヲ得　明治十六年一月十日　布告第三號

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内始審裁判所長ヲ以テ其裁判長ト爲スヿヲ得

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ從前ノ通タル可シ

右奉　勅旨布告候事

〔十四〕小笠原島違警罪及輕罪重罪管轄及治罪手續　第二百六十六ノ一項ニ掲ク

〔十五〕伊豆七島違警罪輕罪裁判管轄及治罪手續　同上第二項ニ掲ク

〔十六〕樺戸集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者裁判手續　明治十五年三月三日　布告第拾六號

樺戸集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉　勅旨布告候事

〔十七〕札幌根室始審裁判所治罪手續等　明治十五年六月二十日　布告第三拾號

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ內治罪ノ手續便宜取計且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ

右奉　勅旨布告候事

〔十八〕沖繩縣管內重罪犯處分方及治罪手續　明治十五年七月八日　布告第三拾三號

治罪法第三十八條參看

治罪法第七十條參看

明治十四年十二月第七拾八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處沖繩縣管內重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ內同縣ニ於テ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ長崎控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ治罪ノ手續ハ便宜ノ取計ヲ爲スコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

〔十九〕空知集治監ノ囚人輕罪以下ノ罪ヲ犯シタル者裁判及治罪手續　明治十五年八月十二日　布告第四拾壹號

空知集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉　勅旨布告候事

〔二十〕釧路集治監ノ囚人犯罪ノ者處分方　明治十八年十二月十七日　布告第四十二號

釧路集治監ノ囚人出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉　勅旨布告候事

〔二十一〕法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ニ處スヘキ重罪事件ハ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

十四年第七十八號布告八十六年第三十三號布告ヲ以テ改ス

治罪法第七十條參看

治罪法第三十八條參看

治罪法第七十條參看

明治十五年六月十日司法省達丙第貳拾壹號大審院裁判所管轄廳府縣（東京府ヲ除ク）東京憲兵本部被告事件軍罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相達候事

治罪法第四十四條參看

〔二十二〕陸軍治罪法施行ニ付已決囚ニシテ重輕罪ヲ犯ス者等有之時ハ地方管轄裁判所ニ送付セシム

明治十六年九月二十一日司法省達丁第貳拾三號大審院

今般陸軍治罪法施行相成候ニ付キ左ノ通陸軍卿ヨリ照會有之候條爲心得此旨相達候事

已決軍罪囚其他裁判宣告ニ依リ軍籍ヲ脫シタル者ト雖モ犯罪之レ有ル時ハ舊慣ニ據リ軍衙ニ於テ審判致來候處今般陸軍治罪法御頒布ニ付テハ特例アルモノヲ除ノ外ハ軍衙ニ於テ審判シ得ヘカラサル者ニ有之候間右已決囚ニシテ重輕罪ヲ犯ス者等有之候時ハ地方管轄裁判所ニ送付セシメ候間豫メ御達置相成度此段及御照會候也

陸軍卿代理
參事院議長山縣有朋

明治十六年九月十三日

司法卿大木喬任殿

追テ自今本文ノ如キ罪囚ハ悉ク地方監獄ニ交付ノ見込ニ有之候此段申添候也

〔二十三〕商船内犯罪取扱規則ヲ制定ス

明治十四年十二月十五日布告第六拾五號

商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

右奉　勅旨布告候事

（別紙）

商船内犯罪取扱規則

治罪法第七十條及第七十三條第九條參看

第一條　何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルヿヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スヿヲ得

第二條　船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルヿヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルヿ能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條　船長ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纒メ被告人ト共ニ該船碇舶又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

〔二十四〕陪席判事及補充判事ハ其裁判所長又ハ院長ノ指定スル所ニ任ス

明治十四年十月六日布告第五拾五號

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

〔二十五〕治罪法第八十三條ニ記載シタル事件ヲ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得

明治十六年十二月二十八日布告第四拾九號

治罪法第八十三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判ス

ルコトヲ得

右奉　勅旨布告候事

〔二十六〕令狀樣式ヲ定ム　明治十四年十二月十二日
司法省達丁第貳拾八號大審院裁判所

治罪法中ニ掲ケタル送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀及宣告書式別紙ノ通相定候條右ニ照準ス可シ此旨相達候事

（別紙）

用紙美濃ノ類

送達書

〔一送達スヘキ書名　壹冊〕
〔一同　壹通〕
右使丁ヲ以テ〔何府縣下何町又ハ何國何郡何村何番地何某ヘ〕送達セシムル者也

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	送達シタル月日時	送達シタル場所	税關雇人若クハ戸長ヘ書類ヲ渡シタル時ハ其事由

〔括弧内及裁判所印並及割印ハ朱〕
輪郭寸法凡　竪七寸五分　横五寸四分

明治　年　月　何裁判所日印之印

〔何裁判所〕
書記〔氏名印〕

右送達候也
使丁〔氏名印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ
一葉ヲ書記局ヘ還納ス可シ

送達書

〔一送達スヘキ書名　壹冊〕
〔一同　壹通〕
右使丁ヲ以テ〔何府縣下何町又ハ何國何郡何村何番地何某ヘ〕送達セシ

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	送達シタル月日時	送達シタル場所

ムル者也

明治　年　月　何裁判所之印　日

〔何〕裁判所

書記〔氏　名　印〕

親屬雇人若クハ戸長ヘ書類ヲ渡シタル時ハ其事由

右致送達候也

使丁〔氏　名　印〕

呼出狀

〔住所身分職業〕

〔氏　名〕

右〔云々〕ノ事件ニ付證人トシテ相尋ル儀有之來ル〔何月日時何〕所ニ出頭

此呼出狀ハ出頭ノ節書記局ニ差出ス可シ

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由

送達シタル月日時

送達シタル場所

可致者也

但同日時出頭セサルニ於テハ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

明治　年　月　何裁判所之印　日

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏　名　印〕

書記〔氏　名　印〕

親屬雇人若クハ戸長ニ渡シタル時ハ其事由

右之通取扱候也

明治　年　月　日

使丁〔氏　名　印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ一葉ヲ書記局ヘ還納ス可シ

呼出狀

〔住所身分職業〕

〔氏　名〕

此呼出狀ハ出頭ノ節書記局ヘ差出ス可シ

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由

右〔云々〕ノ事件ニ付證人トシテ相尋ル儀有之來ル〔何月日時何〕所ニ出頭可致者也

但同日時出頭セサルニ於テハ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヿアル可シ

明治　年　月　日　何裁判所之印

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏名印〕

書記〔氏名印〕

送達シタル月日時	送達シタル場所	親屬雇人若クハ戸長ニ渡シタル時ハ其事由

召喚狀

〔住所身分職業〕

〔氏名〕

右之通取扱候也

明治　年　月　日

使丁〔氏名印〕

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由

右〔云々〕ノ事件ニ付訊問ノ筋有之〔何月日時〕當裁判所ニ出頭可致者也

明治　年　月　日　何裁判所時之印

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏名印〕

書記〔氏名印〕

送達シタル月日時	送達シタル場所	親屬雇人若クハ戸長ヘ書類ヲ渡シタル時ハ其事由

右之通取扱候也

明治　年　月　日

使丁〔氏名印〕

召喚狀

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ一葉ヲ書記局ヘ還納スヘシ

〔住所身分職業〕
〔氏　名〕

右〔云々〕ノ事件ニ付訊問ノ筋有之〔何月日時〕當裁判所ニ出頭可致者也

明治　年　月　何裁判日時所之印

〔何〕裁判所
豫審判事〔氏名印〕
書　記〔氏名印〕

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	
送達シタル月日時	
送達シタル場所	
親屬雇人若クハ戸長ヘ書類ヲ渡シタル時ハ其事由	

右之通取扱候也

明治　年　月　日

使丁〔氏名印〕

〔檢事官印〕

勾引狀

〔住所身分職業〕
「氏　名」
〔若シ氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付訊問ノ筋有之當裁判所ヘ勾引ス可キ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治　年　月　何裁判日時所之印

〔何〕裁判所
豫審判事〔氏名印〕

勾引シタル被告人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	
執行シタル月日時	
執行シタル場所	
執行ノ手續	〔被告人ニ正本ヲ示シ謄本ヲ下付ス〕
家宅搜索ヲ爲シタル時ハ其事由	
勾引スル能ハサル時ハ其事由	

右之通取扱候也

明治　年　月　日

書記〔氏名印〕

割印

〔巡査又ハ憲兵氏名印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ

一葉ヲ書記局ヘ還納ス可シ

〔檢事官印〕勾引狀

〔住所身分職業〕

〔氏　名〕

〔若シ氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付訊問ノ筋有之當裁判所ヘ勾引ス可キ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

勾引シタル被告人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	
執行シタル月日時	
執行シタル場所	
執行ノ手續	〔被告人ニ正本ヲ示シ謄本ヲ下付ス〕
拘引スル事能ハサル時ハ其事由	

明治　年　月　日　何裁判所時之印

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏　名　印〕

書記〔氏　名　印〕

右之通取扱候也

明治　年　月　日

〔巡査又ハ憲兵氏名印〕

〔檢事官印〕勾留狀

〔住所身分職業〕

〔氏　名〕

〔若シ氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付治罪法第百二十六條ノ規則ニ從ヒ〔何所〕監倉ヘ勾留

勾留シタル被告人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	
執行シタル月日時	
執行シタル場所	
執行ノ手續	〔被告人ニ正本ヲ示シ謄本ヲ下付ス〕

ス可キ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ捜索スヘシ

明治　年　月　日

何裁判所時之印

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏名印〕

書記〔氏名印〕

〔検事官印〕勾留状

〔住所身分職業〕

勾留シタル被告人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	家宅捜索ヲ爲シタル時ハ其事由	勾留スル能ハサル時ハ其事由

右之通取扱候也

明治　年　月　日　時

〔巡査又ハ憲兵氏名印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ一葉ヲ書記局ヘ還納ス可シ

〔検事官印〕収監状

〔氏名〕

〔若シ氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付治罪法第百二十六條ノ規則ニ從ヒ〔何所〕監倉ヘ勾留ス可キ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ捜索ス可シ

明治　年　月　日

何裁判所時之印

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏名印〕

書記〔氏名印〕

執行シタル月日時	執行シタル場所	執行ノ手續	家宅捜索ヲ爲シタル時ハ其由	勾留スル能ハサル時ハ其由
		〔被告人ニ正本ヲ示シ謄本ヲ下付ス〕		

右之通取扱候也

明治　年　月　日　時

〔巡査又ハ憲兵氏名印〕

〔住所身分職業〕

〔〇未遂犯ニ付減等〇未丁年ニ付減等〇自首ニ付減等〇再犯ニ付加重〕氏　名

〔若シ氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付取調ヲ爲シタル處本罪刑法第〔何〕條ニ該ル可キ者ト思料ス依テ檢事ノ意見ヲ聞キ〔何所〕監倉ニ收監ス可キ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治　年　月　日

〔何〕裁判所　何裁判所時之印

豫審判事〔氏名印〕

收監シタル被告人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	
執行シタル月日時	
執行シタル場所	
執行ノ手續	〔被告人ニ正本ヲ示シ謄本ヲ下付ス〕
家宅搜索ヲ爲シタル時ハ其由	
收監スルヿ能ハサル時ハ其事由	

右之通取扱候也

明治　年　月　日　時

書記〔氏名印〕

〔巡査又ハ憲兵氏名印〕

是ヲ中斷シテ一葉ヲ受取人ヘ渡シ

一葉ヲ書記局ヘ還納ス可シ

〔檢事官印〕收監狀

〔住所身分職業〕

〔〇未遂犯ニ付減等〇未丁年ニ付減等〇自首ニ付減等〇再犯ニ付加重〕氏　名

〔若シ氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付取調ヲ爲シタル處本罪刑法第〔何〕條ニ該ル可キ者ト思料ス依テ檢事ノ意見ヲ聽キ〔何所〕監倉ニ收監ス可キ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ搜索

收監シタル被告人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由	
執行シタル月日時	
執行シタル場所	
執行ノ手續	〔被告人ニ正本ヲ示シ謄本ヲ下付ス〕
家宅搜索ヲ爲シタル時ハ其由	
收監スルヿ能ハサル時ハ其事由	

ス可シ

明治　年　月　日　何裁判所時之印

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏名印〕

書記〔氏名印〕

右之通取扱候也

明治　年　月　日　時

〔巡査又ハ憲兵氏名印〕

宣誓書

〔何々ノ〕事件ニ付愛憎畏懼ノ心ナク總テ正實ニ〔通譯陳述〕〔鑑定〕ス可

キヿヲ誓フ

明治　年　月　日　〔通事〕〔証人〕〔鑑定人〕〔氏名印〕

〔二十七〕治罪法令狀樣式大審院裁判所ヘ達ニ付司法警察官ニ於テモ右ニ照準取計ハシム

明治十四年十二月十九日　司法省達丙第拾七號整頓府縣（東京府ヲ除ク）

治罪法令狀樣式別紙丁第貳拾八號ノ通大審院裁判所ヘ相達候條其旨可相心得且司法警察官ニ於テ令狀ヲ發スル時ハ右ニ照準シテ取計フ可シ此旨相達候事

（別紙ハ前同一ニ付除之）

〔二十八〕送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀宣誓書ハ半紙換用ヲ許ス　明治十八年八月十三日　司法省丁第十六號大審院裁判所

明治十四年當省丁第二十八號達送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀宣誓書式第壹號及ヒ明治十七年當省丁第八號達民事呼出狀並送達書式第壹號ニ用紙美濃紙ノ類ト記載有之候處右ハ半紙ヲ以テ換用スルモ苦シカラス此旨相達候事

同年丁第拾八號ヲ以テ同一ノ件ヲ始審裁判所ヘ達ス（同文但丁十四號ヲ丙六號トス）

〔二十九〕軍人軍屬ノ犯罪未決中逃走シタルニ付陸軍法衙ヨリ依頼ノ節捕縛取計方 明治十五年三月二十日 司法省達丁第拾七號控訴裁判所

軍人軍屬ノ犯罪未決中逃走シタルニ付陸海軍衙ヨリ捕縛方依頼有之候節ハ本年本省丁第拾四號達ニ依リ捕縛方取計フ可シ此旨相達候事

〔三十〕在本邦外國公使館ニ傭ハレタル內國人ニ對シ令狀發付方 明治十六年三月十二日 司法省達丙第壹號大審院裁判所管視廳府縣（東京府ヲ除ク）

刑事裁判上在本邦外國公使館ニ傭ハレタル內國人ニ對シ發スヘキ令狀ハ明治七年第百貳拾八號公達ニ據リ公使館ニテ唯諾ノ上執行セシムヘキハ勿論ニシテ其ノ唯諾ヲ經ルノ手續ハ明治十四年第五十三號公達ノ旨モ有之ニ付大審院并裁判所ハ其事柄ヲ明記シ當省ヘ申出指令ノ上其令狀ヲ發シ又警視廳府縣ニ於テハ其長官ヨリ外務省ヘ申出右唯諾ヲ經ルノ手續キヲ了シ令狀ヲ執行セシムヘキ儀ト心得ヘシ爲念此旨相達候事

但本文令狀執行者ハ專ヲ明治七年第百貳拾五號公達ノ旨趣ニ據リ聊不都合ノ取計無之樣厚ク注意セシムヘシ

〔三十一〕既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ令狀發付方 明治十四年十二月二十八日 司法省達丙第貳拾號大審院裁判所管視廳府縣（東京府ヲ除ク）

新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可心得此旨相達候事

〔三十二〕既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スルノ手續 明治十五年二月十四日 司法省達丙第六號大審院裁判所管視廳府縣（東京府ヲ除ク）

始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左之通心得可シ此旨相達候事

第一條　逮捕狀ニハ典獄ノ報知書ニ依リ第貳號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相等ヲ詳記スヘシ

治罪法第百三十五條及二十年內務省令第三號（第九十九ノ九項）參看

但管轄地ノ內外ニ拘ハラス急遽ノ際巡査ヲシテ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ナシ

第二條　管轄地內ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシムル可シ

第三條　管轄地外ハ第壹號書式ニ準シ人相書ヲ作リ之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ囑託スルヿヲ得

囑託ヲ受ケタル檢事ハ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作リ之ヲ管轄地內ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第四條　司法警察官ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル時ハ之ヲ管轄檢事ニ送致シ檢事ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ照會シ別段ノ事由アルニ非サレハ逮捕ノ地ニ於テ刑ノ執行ヲ爲ス可シ

（原表輪廓 竪九寸 横七寸四分）（括弧內朱書）

〔第壹號〕

人相書

〔本籍身分〕

〔氏　名〕

〔年齡〕

丈

顏

色

頭髮

眼

眉

鼻	
口	
耳	
齒	
音聲	
痘痕	
疵所	
鬚髯ノ有無	
其他特徴	
長所	
父母妻子	
逃走ノ際着用衣服	
同上ノ際持去物品	
罪名	
刑名及ヒ其期限	

右者〔何方〕ニ於テ處刑中明治〔何〕年〔何〕月〔何〕日第〔何〕時〔何〕分逃走候ニ付逮捕ノ

御處分有之度候也

明治　年　月　日　〔何裁判所ノ印〕

〔何〕裁判所

検事〔氏名〕殿

〔何〕裁判所

検事〔氏名〕印

〔第二號〕

逮捕狀

〔罪名並ニ刑名及ヒ其期限〕〔本籍身分〕氏名〔年齢〕

右者〔何方〕ニ於テ處刑中明治〔何〕年〔何〕月〔何〕日第〔何〕時〔何〕分逃走〔管内ニ發スル逮捕狀ニハ「シタル以下有之」迄ノ二十二字ヲ除ク〕シタル趣ヲ以テ〔何〕裁判所検事ヨリ逮捕方囑託有之候ニ付嚴密捜索ヲ遂ケ見當リ次第逮捕ス可キ者也

但本人潛匿シタル時ハ家宅ヲ捜索ス

執行シタル月日時	執行シタル場所	家宅捜索ヲ爲シタル時ハ其事由	勾引スルヿ能ハサル時ハ其事由

可シ

明治　年　月　日

何裁判日時外ノ印

〔何〕裁判所

検事〔氏　名〔印〕〕

右之通取扱候也

明治　年　月　日

〔巡査又ハ憲兵氏名〔印〕〕

人相書

〔表〕

丈

顔

色

頭髪

眉

眼

鼻

口

耳

歯

〔裏〕

音聲

痘痕

疵所

鬚髯ノ有無

其他特徴

長所

父母妻子

逃走ノ際着用衣服

同上ノ際持去物品

〔三十三〕既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ハ始審裁判所所在地ノ外其刑ヲ執行スル警部ニ於テ發セシム　明治十五年四月十七日司法省達丙第拾四號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ儀ニ付テハ昨明治十四年丙第貳拾號ヲ以テ相達置候處始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ現ニ北刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀ト可心得此旨更ニ相達候事

〔三十四〕被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留方　明治十五年二月十六日司法省達丙第七號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留ノ儀ニ付東京輕罪裁判所檢事大塚孟巍ヨリ別紙甲號ノ通伺出候ニ付乙號ノ通内訓ニ及ヒ候條爲心得此旨相達候事

（別紙）

甲號

明治十四年太政官第四拾六號ヲ以テ前犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕

ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘキ旨御布告相成候處右實際取扱方ノ儀ハ被告人逮捕ノ地ノ檢察官ニ於テ事件ノ摸樣ヲ審按シ其被告人ヲ管轄裁判所ニ送致スルヲ要セスト思料シタル時ハ事案ノ顚末ヲ犯罪地ノ檢事ニ通知シ併セテ其嘱託アル可哉否ヲ照會シ其嘱託ヲ待テ起訴可及手續ニ可有之果シテ然ラハ被告人所在地ノ司法警察官ニ於テ其擧動犯人ト思料スヘキ者アル等現行犯ニ准シ處分シ得ヘキ被告人ヲ逮捕シ拘留狀ヲ發シ一應ノ搜査ヲ爲シタル後檢事ニ送致シタル時ノ如キ其拘留狀執行ヨリ概子已ニ六七日ヲ經過スルヲ以テ嘱託ノ藝ニ關シ檢事ヨリ前記ノ照會中拘留狀十日ノ期限ヲ過クル者往々之アリ然ルニ檢事ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ被告人ヲ貸付スルノ職權ナキニ因リ重罪犯又ハ逃走等ノ恐アリテ解放シ得ヘカラサル者ニ付テハ如何ヒ處分ノ施シ樣モ無之去リ迚拘留日數經過ノ一點ニ拘束セラレ前書ノ照會ヲモ用ヒスシテ直ニ其被告人ヲ犯罪地ノ檢察官ニ送致スルカ如キハ嘱託法ヲ設ケラレタル御旨趣ニ相戻リ可申又タ前書ノ照會一々電報ヲ借ルニ至テハ其事案ノ顚末ヲ盡ス能ハザル而已ナラス此等ノ事件ハ實際頻々遭遇スル所ニシテ其經費モ亦小額ナラサル儀ト存候就テハ右等ノ場合ニ於テハ如何處分致可然哉此段相伺候條至急何分ノ御指令ヲ仰キ候也

明治十五年一月二十四日

司法卿大木喬任殿

東京輕罪裁判所

檢事　犬塚盛巍

乙號

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中勾留ノ儀ニ付伺ノ趣ハ豫テ管轄裁判所ヨリ嘱託ヲ爲シタルモノト看做シ一面ハ其裁判所ニ豫審若クハ公判ヲ求メ一面ハ其犯罪ノ地ノ檢察官ニ其旨ヲ通知スヘシ此旨及內訓候也

明治十五年二月十五日

司法卿大木喬任

東京輕罪裁判所

檢事　犬塚盛巍

〔三十五〕治罪法第百三十五條ニ從ヒ人相書及逮捕狀ヲ作ルノ手續　明治十五年二月二十三日 司法省達丁第拾四號大審院裁判所

治罪法第百三十五條ニ從ヒ豫審判事ヨリ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ若クハ其檢事長ヨリ管轄地內ノ檢事ニ搜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ命スル時ハ本年本省丙第六號達第壹號書式ニ照依シテ人相書ヲ作リ其命ヲ受ケタル檢事ハ第貳號書式ニ照依シテ逮捕狀ヲ作ルヘシ此旨相達候事

〔三十六〕巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシメ又ハ人相書ヲ發シ搜索及逮捕請求處分心得方　明治十五年四月十二日 司法省達丁第貳拾四號裁判所

輕罪裁判所

豫審判事

左之通豫審判事ニ及內訓候條爲心得此段相達候事

治罪法第百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ被告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限リ輙ク其處分ヲ爲ス可キ者ニアラス又第百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ搜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヿヲ請求スル者ハ專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スルヿ能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハス惡ク人相書ヲ發スル者ニアラサルナリ此等ハ乘ヲ注意アル可キ事ナレヒ猶ホ誤解無之樣爲念此段及內訓候也

明治十五年四月十二日

司法卿大木喬任

〔三十七〕刑事裁判言渡ヲ犯人ノ本籍ヘ通知方　明治十四年十二月十九日 司法省達丁第三十三號裁判所

刑事裁判言渡ヲ犯人ノ本籍ヘ通知シ及ヒ犯人前科取調ノ儀是迄區々相成居候處來明治十五年一月ヨリ左ノ通可相心得此旨相達候事

二十年内務省訓令（第三號第九十九ノ九項）參看

刑事裁判言渡アリタルトキハ治罪法第四百六十四條ニ掲クル既決犯罪表寫ヲ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ右送致ヲ受タル檢事ハ其旨ヲ犯人本籍ノ地ノ戸長ニ通知シ該表ハイロハ標號ニ從ヒ區別編纂致置可シ

犯罪人ノ前科取調ヲ要スルトキハ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ照會シ檢事ハ編纂致置タル既決犯罪表寫ヲ送致スヘシ

既決犯罪表

イ號

何裁判所

イ號目錄

伊藤某　一丁

生駒某　二丁

飯塚某　三丁

イ號目

何裁判所既決犯罪表

〔號〕

〔イ〕

氏名	年齢	職業	住所	出生ノ地	本籍	罪名	刑名	犯數
〔伊藤某〕	〔何年何月〕	〔何々〕	〔何府縣何郡區何町村〕	〔同上〕	〔同上〕	〔窃盗〕	〔重禁錮何年（或ハ何月）〕	〔初犯（或ハ再犯）〕

裁判言渡ヲ爲シタル年月日	對審闕席區別
〔何年何月何日〕	〔對審裁判（或ハ闕席裁判）〕

イ號

此表治罪法第四百六十四條ニ依リ裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時其言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ルモノトス但一葉一人ヲ記載シ（イロハ）ノ順序ヲ以テ氏名ヲ區別シテ之ヲ編綴シ探討ニ便ス可シ

表中ノ朱書ハ記載ノ一例ヲ示スモノナレハ（ロ）以下モ之ニ準ス可シ

刑名ノ條ヲ記スルニ假令ハ重禁錮何年監視何月（自首若クハ酌量ニ據リ何等減）又ハ（再犯若クハ刑法何條ニ據リ何等加）ノ如ク加減或ハ再犯加重ニ係ル者ハ必ラス之ヲ附記スヘシ若シ無罪及免訴ニ係ル者アル時ハ證憑不充分ニ付無罪又ハ期滿免除確定裁判ヲ經ルニ付免訴ト書スルカ如ク無罪ノ事由幷ニ治罪法第二百二十四條第三以下各項ノ事由ヲ簡明ニ附記スヘシ

犯數ノ條ハ（從法ニ據リ處斷何度）（新法ニ據リ處斷何度）ト區別記載スヘシ

十五年十二月司法省達丁第五十八號ヲ以テ末ノ二項ヲ追加ス

〔三十八〕帶勳者ノ犯罪ニ付勳章ヲ褫奪シタル時犯人本籍ヘ通知方 明治十九年四月三十日司法省令丙第六號大審院裁判所

刑事裁判言渡ヲ犯人本籍ヘ通知方ノ儀明治十四年當官丁第三十三號ヲ以テ相達置タル處自今帶勳者ノ犯罪ニ付勳章ヲ褫奪シタル時ハ其旨併セテ通知ス可シ

〔三十九〕裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ

治罪法第百四十八條參看

訊問スルコトヲ得 明治十六年三月七日 布告第八號

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

〔四十〕治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官證人トメ出廷方及着席 明治十五年三月二十二日 司法省達丙第拾號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トスルトキハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ此旨相達候事

〔四十一〕告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷ヘ呼出スヿ處分方 明治十五年六月十二日 司法省達丙第三拾貳號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)東京鎮兵本部

治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷ヘ呼出ス時ハ本年本省丙第拾號達ニ準シ處分スル儀ト心得可シ此旨相達候事

但シ巡査及ヒ等外吏ノ著席ハ此限ニアラス 同年丙第三拾壹號省達但書改正

〔四十二〕官吏職務ニ關スル事件ニ付證明セシムル爲メ呼出ヲ要スルヿ取扱方 明治十五年十月二十八日 司法省達丙第三拾貳號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)鎮兵本部

總テ官吏ヲシテ職務ニ關スル事件ニ付キ證明セシムル爲メ其呼出ヲ要スルトキハ本年當省丙第拾號達ニ準シ取扱フ可シ此旨相達候事

但シ巡査及ヒ等外吏ノ著席ハ此限ニアラス

同年司法省丁第廿三號ヲ以テ本件ヲ大審院裁判所ヘ達ス

〔四十三〕已決囚ニ對スル宣告又ハ證人トシテ出廷セシメ用濟トナリタル時司獄官ヘ書類送致又ハ報知方 明治十七年六月二十三日 司法省達丙第貳號大審院裁判所警視廳府縣(東京府ヲ除ク)

已決囚ノ犯罪ニ付キ之ヲ裁判所ニ呼出シ審理ノ末刑ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テハ明治十五年當省丙第八號達ニ依リ檢察官ヨリ其宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送達スルハ勿論自今已決囚ニ對スル其他ノ宣告ニ付テモ其豫審ニ係ルト公判ニ係ルトヲ問ハス書記ヨリ宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送致シ又證人トシテ出廷セシメタル已決囚用濟ニ至リタル時ハ亦書記ヨリ其旨ヲ司獄官ニ報知ス可キ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

〔四十四〕司法官吏ヨリ巡査及兵員ヲ要求使用スルノ手續 明治十四年九月二十日 太政官達第八拾貳號官省院使廳府縣

司法官吏ヨリ巡査及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司宗警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡査又ハ憲兵卒ヲ使用スルヿヲ得

但事機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルヿヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ渉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヿヲ得

〔四十五〕大審院裁判所公廷取締ノ爲メ巡査ヲ詰サセ又ハ被告人護送ノ巡査押丁ヲシテ公廷ニ入リ看護セシム 明治十四年十月四日 太政官達第八拾六號警視廳府縣(東京府沖繩縣ヲ除ク)

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スルタメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡査爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡査或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入リ看護セシムヘシ此旨相達候事

〔四十六〕豫審判事檢證及物件差押ノ事件ニ付巡査同行使用方 明治十四年十月四日 司法省達丙第拾五號警視廳府縣(東京府沖繩縣ヲ除ク)

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡査ヲ同行シ又ハ所在ノ巡査ヲ使用ス

ル儀モ有之候條豫テ可達旨此旨相達候事

〔四十七〕裁判所ニ於テ検證ノ爲メ四人ヲ召連出張ノ節護送及費用支辨方 明治十五年六月五日 内務省達乙第三拾五號警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

裁判所ニ於テ検證ノ爲メ四人ヲ召連レ他所出張ノ節ハ巡査ヲシテ護送セシムヘシ此旨相達候事

但護送巡査ノ旅費其他四人ニ屬スル費用共派テ警察費ヨリ支辨スヘシ

〔四十八〕検證ノ爲メ四人召連出張ノ節其他警察官ヘ護送引致方ヲ通知セシム 明治十五年六月十三日 司法省達丁第三拾三號大審院裁判所

審理ノ都合ニ依リ検證ノ爲メ四人召連他所出張候節ハ其地ノ警察官ヘ護送引致方通知可致尤右護送ニ屬スル費用ハ派テ警察費ヨリ支辨ノ筈ニ候條此旨相達候事

〔四十九〕犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ書類差押手續 明治十七年五月三十日 司法省達丙第壹號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）鎮兵本部

犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ書類ヲ差押フル儀ニ付甲號福井縣上申ニ對シ乙號ノ通及指令候條爾後戸籍帳等ノ差押ニ付テハ右ノ手續ニ依リ取扱フ可キ儀ト心得可シ此旨相達候事

甲號

裁判所ニ於テ犯罪證據物トシテ戸長役場備置ノ要書差押ヘタル節還附方ノ儀ニ付上申

犯罪證據物トシテ裁判所ニ於テ戸長役場備置ノ戸籍帳又ハ土地建物船舶賣買讓渡質入書入奥書割印簿等ヲ差押ヘ數十日間還附セサルヿアリ然ルニ戸長役場ニ於テハ部下ノ人民生死送入籍其他ノ異動加除ヲ要シ又ハ賣買公證ヲ請ヒ就中質入書入契約ノ如キ義務消滅ニ據リ公證取消ノ儀申出ル者アルモ本簿某照校消印スル能ハサルヲ以テ其旨ヲ具ヘ簿冊下戻方裁判所ヘ照會スルモ某事件ニ付差押ヘタル證據物ナル故一件落着迄還付シ難キ旨回答有之取扱上頗ル差支候趣

ヲ以テ伺出候向アリ右ハ犯罪證據物トシテ差押ヲ要スルハ其一部分ニ止ルヘクシテ而シテ該簿冊ニ登載セル其他ノ事件全体ニ關シ行政上取扱ニ支障ヲ來シ不都合不尠就テハ斯場合ニ於テハ其必要ノ廉ハ裁判所ニ於テ謄寫シ本書加除スルヲ得サル樣掛紙契印等ヲ爲シ而シテ簿冊ハ直ニ還付スヘク樣致度御詮議ノ上何分ノ御指揮相成度此段上申候也

明治十七年一月二十九日　　福井縣令　石黒　務

内務卿山縣有朋殿
司法卿山田顯義殿

乙號

書面上申之趣聞屆候尤裁判所ニ於テ謄寫セシ該書ヘハ戸長之レニ調印スヘシ若シ其謄寫ニ拘ハル内ニ加除等ヲ要スル時ハ其都度裁判所ノ許否ヲ得ヘキ儀ト可心得事

明治十七年五月二十八日

〔五十〕被告人ヲ他ノ監倉ニ移スノ手續 明治十五年五月二日 司法省達丙第拾八號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

治罪法第二百六十條ノ場合ニ於テ被告人ヲ重罪裁判所開廳ノ地ノ監倉ニ移ス時ハ検事ハ前令狀ニ検事長ノ命令書ノ寫ヲ添ヘテ重罪裁判所検察官ニ送致シ其検察官ハ是等ノ書類ヲ其地ノ監倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲ爲スヘシ其他法律ニ從ヒ被告人ヲ他ノ監倉ニ移ス場合ニ於テモ此例ニ準スル義ト心得ヘシ此旨相達候事

〔五十一〕裁判言渡ノ謄本又ハ拔書ヲ求ムル費用上納方 明治十四年十二月二日 司法省布達甲第七號

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト可心得此旨布達候事

〔五十二〕無資力ノ者ハ無代價ニシテ裁判言渡ノ謄本又ハ拔書ヲ下渡スヲ許ス 明治十四年十二月十五日 司法省達丁第三拾壹號裁判所

本年本月甲第七號布達裁判言渡ノ謄本又ハ拔書ヲ求ムル者代價ノ儀無資力ニシテ上納スル能ハサル者ニ限リ無代價ニテ

治罪法第三百十五條參看

治罪法第三百十五條參看丁第九號ヲ以テ納付方ヲ達ス

治罪法第三百十五條參看

下渡スモ不苦儀ト可心得此旨相達候事

〔五十三〕検察官ニ於テ裁判所ノ命令及言渡ヲ執行スルニ當リ其謄本ヲ要スルトキ交付方 明治十五年二月十三日司法省達丙第五號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

検察官ニ於テ裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮スルニ當リ其命令書若クハ言渡書ノ謄本ヲ要スル時ハ該書記局ニ於テ速ニ其謄本又ハ抜書ヲ作リ交付スヘキ儀ト心得可シ此旨相達候事

〔五十四〕裁判言渡ノ謄本又ハ抜書ヲ下付スル費用ハ違警罪ニ限リ徴收セス 明治十五年三月二十七日 司法省達丙第拾貳號裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

明治十四年十二月當省甲第七號布達裁判言渡ノ謄本又ハ其抜書ヲ下付スル費用ハ當分違警罪ニ限リ徴收セサル樣取計ヘシ此旨相達候事

〔五十五〕違警罪裁判言渡ノ謄本又ハ抜書ヲ下付スル費用徴否取計方 明治十八年十二月九日 司法省達丙第十號裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

明治十五年三月當省丙第拾貳號ヲ以テ違警罪裁判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ下付スヘキ費用ハ當分徴收スヘカラサル旨相達置候處本年九月第三拾壹號ヲ以テ違警罪即決例公布相成候付テハ自今該裁判ノ正式ニ係ルモノハ該費用ヲ徴收シ其即決ニ係ルモノハ從前ノ通取計可シ此旨相達候事

〔五十六〕帶勲有位者罪ヲ犯シ公權剝奪又ハ停止ノ言渡アリタルトキ屆出方 明治十五年三月六日 司法省達丙第九號大審院裁判所府縣（東京府ヲ除ク）

帶勲者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタルトキハ其罪狀并刑名宣告文ノ寫ヲ以テ當省ヘ可屆出此旨相達候事

但剝奪公權ノ者ハ勲記勲章并年金票共收奪ノ上當省ヘ差出スヘク候事

治罪法第三百十五條參看

〔五十七〕奏勅任官華族帶勲有位者禁錮以上ノ刑ヲ犯シタル時處分方 明治十五年三月二十七日 司法省達丙第拾壹號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

（別紙）

司法省

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勲有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルヿヲ得此旨相達候事

明治十五年三月二十二日

太政大臣三條實美

〔五十八〕恩給扶助料ヲ有スル元軍人並軍人及寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪停止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキ大藏省ヘ通知方 明治十六年四月二十七日 司法省達丁第拾五號大審院裁判所

明治八年第百四拾八號公達海軍退隱令並ニ明治九年第九拾九號公達陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ受ケ並ニ該恩給ヲ有スル軍人ニシテ治罪法第二百七十三條ニ據リ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ其都度直ニ大藏省ヘ通知可致此旨相達候事

但新法實施已後是迄本文ノ處分ヲ受ケタル者有之候ハヽ其旨直ニ大藏省ヘ通知可致事

〔五十九〕勅奏官華族并ニ有位帶勲者犯罪取扱ニ付更ニ心得方ヲ達ス 明治十六年五月十四日 司法省達丙第貳號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

勅奏官華族并ニ有位帶勲者犯罪取扱方ノ儀ニ付キ別紙ノ通リ太政官ヘ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

但御指令文中十五年三月二十二日附御達ハ同年當省丙第拾壹號達ト可相心得事

（別紙）

勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀伺

勅任官禁錮ノ刑ニ該ル〻キ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勲有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ル〻キ犯罪取扱方ノ儀ニ付テハ明治十五年三月二十二日附ヲ以テ御達有之候處其罰金ニ處ス〻キモノト雖モ或ハ本人ヲ出廷セシムル場合モ有之且又拘留ノ刑ニ處シ及ヒ罰金科料ヲ納完セサル節ハ則換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ニ處ス〻キ儀モ有之候條右本人出廷セシムル場合及ヒ換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處ス〻キ時ハ矢張其時々奏聞可致儀ト相心得可然哉此段相伺候也

明治十六年三月三十一日　　司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

朱書

伺ノ通

但十五年三月二十二日附其省ヘ達中帶勲有位者トアルハ勲六等以上從六位以上ヲ指シタル儀ト可相心得事

明治十六年五月八日

〔六十〕華族罪ヲ犯シ拘留シタル時宮內省ヘ通牒方

明治十六年十一月八日　司法省達丁第三拾貳號大審院裁判所

華族ノ類（位記ノ有無且戸主隱居子弟ニ拘ハラス）罪ヲ犯シ拘留シタル時ハ自今其院裁判所ヨリ直ニ宮內省ヘ通牒シ猶刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其宣告書ノ謄本ヲ添ヘ是亦同樣速ニ可致通牒此旨相達候事

司法省

〔六十一〕勳章年金褫奪及停止取扱手續

明治十七年一月十二日　司法省達丁第壹號大審院裁判所

勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通被達候條此旨相達候事

別紙陸軍省伺勳章年金褫奪及停止取扱手續ノ儀朱書ノ通及指令候條此旨相達候事

明治十六年十二月廿八日　　太政大臣三條實美

（別紙）

勳章年金褫奪及停止取扱手續之儀ニ付伺

先般勳章年金褫奪及ヒ停止取扱手續御達相成候處其以前卽チ本年第貳拾貳號御布告後第三拾九號御達迄之間ニ於テ右ニ適該スル者アルモ勿論該手續ニ準據ス可カラサル儀ト相心得可然哉之旨伺出候處右ハ本年第貳拾貳號布告發布後ハ第三十九號達ニ據リ處分スル儀ト可相心得旨御指令ノ趣敬承仕候然ルニ該手續第二條ニ據レハ勳章褫奪シタル後處刑言渡ヲ爲スモノト有之候處右第貳拾貳號御布告後第三拾九號御達迄之間ニ於テ已ニ輕重禁錮ノ處分ヲ受ケ又ハ已ニ其刑滿期後ノ者ト有之右等ハ如何ノ手續キヲ以テ褫奪方取扱可然哉至急何分ノ御指揮相成度此段更ニ相伺候也

明治十六年十一月十五日　　陸軍卿大山巖

太政大臣三條實美殿

（朱書）

伺ノ趣本年第貳拾貳號布告後第三拾九號達發表以前ニアツテ既ニ刑ノ言渡ヲナシ未タ勳章褫奪ノ手續ヲナサヽルモノハ該達第三條ノ手續ニヨリ更ニ其罪狀及刑名ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘキ儀ト可相心得事

明治十六年十二月廿八日

〔六十二〕憲兵將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡査ト同ク司法警察ノ事務ヲ行ハシム

明治十五年五月十三日　布告第貳拾三號

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡査ト同シク司法警察ノ事ヲ行ハシム

右奉　勅旨布告候事

治罪法第六十一條參看

〔六十三〕司法警察上巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシム

明治十四年十月十日　司法省布達甲第五號

同年司法省丁第七十號ヲ以テ本文ノ趣ヲ大審院裁判所ヘ達ス

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之候條此旨布達候事
明治十四年十月十日
司法省達丙第拾三號警視廳府縣

〔六十四〕司法警察上巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムルヲ許ス（東京府ヲ除ク）

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ不得止場合ニ於テハ巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシメ不苦候條此旨相達候事
但代理ヲ命スヘキ巡査ノ姓名ハ豫シメ其地方輕罪并違警罪裁判所ヘ通牒致シ置候儀ト心得ヘシ

〔六十五〕巡査ニテ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱タル事件ニ付テハ警部同樣ノ取扱ヲ爲サシム

明治十六年二月二十四日
司法省達丁第九號大審院裁判所
明治十四年十月當省甲第五號布達ニ據リ巡査ニ於テ警部代理ノ資格ヲ以テ取扱事件ニ付テハ裁判上渾テ警部同樣ノ取扱ヲ爲スヘシ此旨相達候事
但從前ノ指令內訓本文ニ牴觸スル條件ハ取消候事

治罪法第三百六十五條以下參看

〔六十六〕輕罪ニ係ル控訴規則

明治十八年一月六日
布告第貳號

明治十四年十二月第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ牴觸スル條件ハ當分ノ內施行セス

第一條　控訴ハ治罪法中本按ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本按ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二條　控訴ノ期限內ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スヿヲ得ス

治罪法第九十八條參看

第三條　被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條　被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條　治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

右奉　勅旨布告候事

〔六十七〕治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及民事擔當人ト稱スル者

明治十四年十二月廿八日
布告第七拾三號

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

無能力者
一　未丁年者
二　妻タル者
三　白痴瘋癲人
四　治產ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

一　未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
二　夫タル者
三　白痴瘋癲ノ保管者
四　治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

一　未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
二　夫タル者
三　白痴瘋癲人ノ保管者
四　雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

右奉　勅旨布告候事

〔六十八〕裁判所所屬ノ代言人無之場所ハ辯護人ヲ用ヒサルモ刑ノ言渡ハ無效ノ限ニアラス　明治十五年一月九日布告第壹號

治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカルヘシト有之候得共其裁判所所屬ノ代言人無之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限リニ在ラス

右奉　勅旨布告候事

〔六十九〕刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルノ手續　明治十四年九月二十日布告第四拾七號

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條　被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判書記局ニ差出サシムヘシ

第二條　責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條　被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

〔七十〕保釋責付中ノ被告人取締方心得　明治十六年十一月五日司法省達丙第八號警視廳府縣

保釋責付中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ付左ノ通各裁判所ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

丁第三十一號　　裁判所

保釋責付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシムヘキ儀ニ付キ保釋責付ヲ爲スノ際其旨ヲ被告人ニ豫知セシムヘシ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條　治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ届出クヘキコトハ言ヲ待タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス若シ已ムヲ得サル事由アルトキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受クヘシ

第二條　裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滯在スルトキハ滯在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ届クヘシ

若シ同居人アラサルトキハ其住所ノ地ノ戸長ニ届出クヘシ

治罪法第二百十條以下參看

第三條　代言人辯護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルヿヲ得ス

第四條　治罪法第百二十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其賣付ヲ受ケタル者モ亦同シ

右相達候事

〔七十一〕公訴裁判費用官ニテ擔當スヘキ場合金額支出方　明治十五年七月七日　司法省達丙第貳拾六號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

治罪法第三百七條第二項公訴裁判費用官ニ於テ擔當スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支出スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令內訓本文ニ抵觸スル件々ハ取消候事

〔七十二〕刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用ハ裁判費用ニ立タス　明治十六年十一月十三日　司法省達丙第九號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

刑事ニ付キ警察官ノ處分ニ屬スル費用ハ起訴ノ前後ニ拘ハラス裁判費用ニ相立タサル者トス然レ𪜈豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲シタル場合ハ此限ニ在ラス此旨爲心得相達候事

但本文ニ抵觸スル指令內訓ハ取消候事

〔七十三〕罰金及追徵ニ係ル上告豫納金ノ件　明治十九年六月十日公布　勅令第四十六號

朕罰金及追徵ニ係ル上告豫納金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治十九年六月九日

內閣總理大臣伯爵伊藤博文

勅令第四十六號

罰金及追徵ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰金及追徵金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告趣意書ニ添ヘ原裁判所書記局ニ預置ク可シ否ラサレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス若シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ沒入スルノ言渡ヲ爲スヘシ

〔七十四〕郵便犯則者ニ對スル未納稅不足稅等徵收方　明治十七年八月十三日　司法省達丙第三號大審院裁判所警視廳府縣（東京府ヲ除ク）憲兵本部

郵便犯則者ニ對スル未納稅不足稅等徵收方ノ儀ニ付太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事

司法省

驛遞局ヨリ郵便犯則者ヲ告訴スルト併セテ未納稅不足稅等ノ徵收ヲ請求スルトキハ其請求ニ應シ之ヲ受理スヘキ儀ト可心得此旨相達候事

明治十七年七月二十三日　太政大臣三條實美

〔七十五〕醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之節內務省ヘ通知方　明治十五年八月二十一日　司法省達丁第四拾貳號大審院裁判所

本年八月第三拾九號公布ニ依リ今般內務卿ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之處斷致シ候節ハ其都度該宣告文謄本相添內務省ヘ通知候樣可致此旨相達候事

〔七十六〕醫師醫業ニ關シテ罪ヲ犯シ處斷セシ內務省ヘ通知方再達　明治十六年十二月二十八日　司法省達丁第三拾九號大審院裁判所

本年第三拾五號布告ヲ以テ明治十五年第三拾九號布告被廢候ニ付同年當省丁第四拾貳號達ハ自然消滅ノ處今般內務卿

十五年第三拾九號布告ハ十六年第三拾五號布告ニヨリ廢ス

ヨリ更ニ照會ノ趣モ有之候條同省ヘ通牒方從前ノ通リ可取計此旨相達候事

〔七十七〕西洋形船船長運轉機手關手免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節農商務省ヘ通牒方 明治十六年七月五日 司法省達丁第貳拾壹號大審院裁判所

明治十四年十二月第七拾五號公布西洋形船船長運轉手機關手免狀規則ニ據リ免狀ヲ有スル者罪ヲ犯シ輕罪以上ノ刑ニ處シタル節ハ刑名並ニ宣告ノ月日ヲ詳記シ其都度直ニ農商務省ヘ通牒スヘシ此旨相達候事

〔七十八〕陸軍常備下士卒服役中違警罪ヲ犯シ處分セシキ本人所管ヘ通報方 明治十六年八月七日 司法省達丙第二六號府縣（東京府ヲ除ク）

陸軍常備下士卒服役中ノ者違警罪ヲ犯シ其處分ヲ爲シタル節ハ其人名前科ヲ詳記シ其都度本人所管（隊附ナレハ該隊長）ヘ速ニ通報可致此旨相達候事

〔七十九〕獸醫及獸類傳染病豫防規則ニ違犯ノ者處分ノ節農商務省ヘ通牒方 明治二十年十二月二十三日 司法省訓令第十號裁判所

十八年八月第二十八號布告及十九年九月第十一號農商務省令ニ依リ今般農商務省ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今獸醫免許規則第十四條並獸類傳染病豫防規則第十九條ノ犯罪其他刑法ニ正條アル獸醫ノ犯罪嫌斷致候節ハ其都度裁判宣告文謄本相添ヘ農商務省ヘ通知スヘシ

〔八十〕犯則ニ由リ官沒ノ物件ヲ戶長ニ於テ公賣ノ節公賣費用支辨方 明治十八年九月十八日 內務省達甲第三十二號府縣

犯則ニ由リ官沒シタル物件ヲ裁判所ノ囑託ニ依リ戶長ニ於テ公賣取扱タル節右公賣ニ關スル費用（物件保守者ノ手當 井戸掘敷料 筆墨紙薪 炭油 雜費）ハ其裁判所ノ費用ニ相立ヘキモノニ付戶長役場費ヨリ支辨セサル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

〔八十一〕犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收ノ物件地方廳ヘ引繼處分方 明治十八年十一月二十六日 太政官達第六十三號府縣

裁判所ニ於テ犯罪又ハ犯則ニ依リ沒收シタル物件ハ自今都テ地方廳ニ引繼地方廳ニ於テ便宜之ヲ賣却スヘシ此旨相達

候事

〔八十二〕犯罪又ハ犯則ニヨリ沒收シタル物件取扱手續 明治十九年四月十九日 大藏省訓令第三號北海道廳府縣

明治十八年十一月太政官第六十三號達犯罪又ハ犯則ニヨリ沒收シタル物件ハ左ノ手續ニ據リ取扱フヘシ

第一項　裁判所ヨリ沒收物件引渡ノ通知ヲ得タルトキハ其物件受取ノ手續ヲ爲シ物件ノ性質ニ從ヒ得失ヲ量リ其廳ニ取寄セ又ハ其所在地ノ戶長ニ保管セシムヘシ

第二項　沒收ノ物件ハ裁判所ヨリ受取タル後三箇月以內ニ於テ公賣ニ付スヘシ但公賣ノ場所ハ物件所在ノ地ニ限ラス總テ適當ノ地ヲ選定スルモノトス

第三項　沒收物件中官廳ノ烙印アルモノハ公賣ニ付スル前其烙印ヲ削除スヘシ

第四項　公賣ノ方法ハ入札拂若クハ競賣ニ據ルヘシ

第五項　沒收ノ物件公賣ニ付スルモ買受人ナキカ若クハ代價相當ノ價格ニ達セサルトキハ公賣ヲ停止シ爾後三箇月以內ニ於テ更ニ公賣ニ付スヘシ

第六項　沒收物件中毀損腐敗ニ係リ若クハ物品輕微ニシテ公賣ニ付スルモ價値ナシト認ムルモノ或ハ運搬費蓋場敷料ヲ要シ公賣スルモ其得失相償ハサルモノ或ハ第五項期限內ニ於テ公賣ニ付スルモ買受人ナク若クハ代價不相當ニシテ公賣ヲ停止シタルモノハ適宜處分スヘシ

第七項　沒收物件中其物品取扱上特ニ成規アルモノハ各主管廳ノ指揮ニ據リ之ヲ處分スヘシ

●伺指令

●違警罪裁判ニ付證人呼出ニ應セサル者處分方ノ伺指令 明治十六年八月四日 新潟縣伺

第一條　治罪法第二百九十六條（前略）檢察官之意見ヲ聽キ前キニ定メタル科料罰金之二倍云々トアル前之字ハ同法第二百九十三條之各項ヲ指シタルモノナルヤ或ハ初度呼出シニ應セサリシトキ右各項之範圍內ヲ以テ云ヒ渡シタル金額ヲ指シタル儀ナルヤ

第二條　治罪法第二百九十六條ニ據リ二倍之科料金ヲ云ヒ渡スヒ式圓以上(壹圓五拾錢ノ二倍ノ如シ)之金額ニナルモ科料ト稱シ得ルハ勿論之儀ナルヤ

右ハ疑義アリ決兼候間至急何分ノ御指令相成度此段相伺候也

司法省指令　明治十六年八月十五日

第一條　治罪法第二百九十三條ノ各項ニ記載シタル科料罰金ノ範圍ノ二倍ヲ云フ者ニシテ其範圍內ヲ以テ先キニ言渡シタル金額ノ二倍ヲ云フニアラス

第二條　科料ト稱スヘシ但シ刑法第七十二條第二項ニ依リ二圓四十錢以上ニ至ルヲ得ス

●治罪法第百三十三條第百八十一條第百八十二條ノ件ニ付請訓　明治十六年八月三十日　京都府請訓

第一條　治罪法第百三十三條ニ家宅ニ潛匿シタリト思料シタルヒハ云々トアリ現ニ見認ル時ト雖モ客年第四十六號公布第五項ヲ除クノ外日出前日沒後ハ家宅搜索雖致筋ニ有之候哉

第二條　仝第百八十一條第百八十二條ニ左ニ記載シタルモノハ証人ト爲ルヿヲ許サスト有之立會人トナルヿヲ得サルノ明文無之ニ付無能力者ヲ除クノ外立會人トナルヿヲ得ル儀ト心得可然哉右及請訓候也

司法省內訓　明治十六年九月十一日

請訓ノ趣第一條令狀執行人ニ於テ現ニ目擊シタル場合若クハ戶主ノ承諾アルヒハ何時ニ拘ハラス家宅搜索ヲ爲スヿヲ得第二條ハ見解ノ通此旨及內訓候也

●令狀ニ書記署名ノ件ニ付請訓　明治十六年九月八日　岐阜輕罪裁判所檢事請訓

本年第八號ヲ以豫審判事豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ內書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スル事ヲ得ト御布告有之ニ付書記ノ立會ナクシテ取調タル豫審事件ノ終結言渡書ノ如キハ無論書記ノ署名ヲ要セサル儀ト存候得共總テノ令狀ニハ治罪法第百三十條第二項ニ依リ書記ノ署名捺印ヲ要ス可キモノナルヤ疑義ヲ生シ候ニ付此段請訓候也

司法省內訓　明治十六年十月四日

別紙請訓ノ趣ハ令狀ハ勿論終結ノ言渡書ヲモ書記ノ連署ヲ要スヘキ者ト心得可シ此段及內訓候也

●豫審終結處分ノ儀ニ付伺指令　明治十六年九月十三日　前橋始審裁判所檢事伺

脅迫姦淫ノ如キ被害者ノ告訴ヲ待テ論スヘキ罪其告訴ニ因リ檢事ノ請求シタル事件ハ假令豫審中被害者ノ藥檻アルモ豫審判事ハ通常ノ規則ニ從ヒ仍終結ノ處分ヲ爲スヘキ筋ト相心得候得共意見反對ノ向モ有之ニ付キ此段相伺候也

但豫審判事ニ於テ未豫審ニ着手セサル內被害者ノ藥檻アル場合ト雖モ檢事ノ請求ニ係ル事件ハ本文同樣處分スヘキ儀ト相心得可然ヤ添テ相伺候也

司法省指令　明治十六年九月廿九日

檢察官ノ起訴ヲ爲シタル後被害者藥檻ヲ爲シタル時ハ豫審判事ニ於テ本案ノ取調ヲ要セス直チニ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキモノトス

●官吏告發ノ儀ニ付伺指令　明治十六年九月二十七日　福岡縣伺

官吏職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪アルヿヲ認知又ハ思慮シタルヒ相當ノ官吏ニ告發スヘキハ治罪法第九十六條ニ於テ命令アル儀ニ有之候然ルニ告發後若其被害人罪トナラサル場合其損害ノ償ヲ要ムルモ法律ノ命令ニヨリ職務ヲ以テ爲シタルモノナレハ其償ノ義務ヲ有セス同法第十七條ニ準據スヘキモノト被存候得共同條ニハ檢察官又ハ司法警察官ト指定シ一般官吏ニ適用スル明文ト雖認候條爲念一應相伺候也

司法省指令　明治十六年十月九日

伺ノ趣治罪法第十七條ニ掲載シタル官吏ト均シク罪償ノ訴ヲ受ケサル儀ト心得ヘシ

●哀訴ニ關スル書類ノ遞送方ノ請訓　明治十六年九月二十六日　京都始審裁判所檢事請訓

治罪法第四百三十七條ヲ按スルニ哀訴ヲ爲サントスル者ハ大審院ノ書記局ニ其申立ヲ爲スヘキヿ明瞭タリト雖モ哀訴者タルヤ罰金及ヒ拘留科料ノ刑ニ處セラレタル者ヲ除クノ外多クハ收監シアルヲ以テ大審院所在ノ地ニ住セサル訴訟關係人ハ直ニ該院ノ書記局ニ之ヲ申立ツルヿ甚タ難シトス而メ茨城縣ノ伺ニ對スル明治十五年五月三十一日ノ

御指令ニ依レハ在監ヨリ差出シタル哀訴狀ハ司獄官吏ヨリ其書類ヲ大審院書記局ヘ回送スヘキ旨趣ナルヲ以テ是ノ賄ニ對シ嫌疑訴ヲ生ス何トナレハ哀訴ノ申立書ヲ司獄官吏ヨリ大審院ヘ送付セハ原裁判所ノ檢察官ハ其哀訴アリシヿヲ覺察セサルニヨリ法律上執行ヲ停止スヘキ日時即治罪法第四百三十八條ニ定メタル三日間ヲ經過スレハ刑ヲ執行スヘキ指揮書ヲ典獄ヘ發セサルヘカラス夫レ之レヲ發付スルモ哀訴アリタル上ハ實際執行ハ停止スヘキ者ナルニ付既ニ發シタル指揮書ハ事實ニ抵觸スルヲ如何セン且不在監ノ訴訟關係人ニシテ哀訴ヲ爲サントセハ遠隔ノ地方ニ住スルモノト雖モ已レ自カラ大審院ニ出頭シ其書記局ヘ哀訴ノ申立ヲ爲スヘキ儀ニ之レアルヘシ然レハ其手續タルヤ頗ル汗遠ニ涉リ實際ニ徵シテハ施行シ難キ場合ナシト概言スヘカラス故ニ哀訴ニ關スルモノト雖モ其書類ノ遞送ハ派テ原裁判所書記局ノ取扱ニ屬セシムル時ハ哀訴ノアリタルヿハ書記局ヨリ檢察官ニ通報スルハ難キニアラス加之拘留不拘留人ノ區別ナク哀訴申立ノ手續ハ同一ニ期シ實際ニ於テモ其宜キヲ得法律ニ矛盾スル所ナシ因テ哀訴ニ關スル書類ノ遞送ハ原裁判所書記局ノ取扱ニ屬スヘキ儀ト相心得可然哉此段伺內訓候也

司法省內訓　明治十六年十月九日

請訓之趣哀訴ハ本人ヨリ代言人ヲ差出スカ又ハ重罪事件ニ係リ大審院ヨリ其代言人ヲ撰任セシ場合ニ非サレハ之ヲ爲ス可カラス但シ治罪法第四百三十八條ニ依リ大審院ノ言渡ハ三日間執行ヲ停止スヘキ者ナレハ其執行ヲ爲シ得ヘキニ至リ檢事長ヨリ執行ヲ命スヘキニ付原裁判所ノ檢察官ニ於テ哀訴アリシヿヲ知ラスシテ執行命令書ヲ發スルカ如キ場合ナカル可シ

●裁判執行方ノ請訓

明治十六年九月二十六日　山形始審裁判所米澤支廳檢事請訓

例ヘハ茲ニ重禁錮三月ニ處セラレタル者アランニ該言渡檢事ノ上告ニ係リ其後滯監二月ニシテ保釋ヲ許サレタリ然ルニ保釋中餘罪發覺シ又ハ更ニ罪ヲ犯シタルヲ以テ大審院ノ判決ヲ待タス直チニ重禁錮五月ニ處スルノ裁判言渡アリタル場合ノ如キハ上告ニ係ル事件ノ刑期ニ拘ハラス其執行ヲ爲スヘキハ勿論ナリト雖モ被刑者ハ前裁判ニ於テ已ニ二月ノ滯監アルヲ以テ此滯監二月ヲ扣除シ執行官ハ餘ル三月ノ執行ヲ爲スヘキ哉將タ上告ニ係ル事件ト本件トハ全ク別物ナルニ依リ之ヲ扣除スルノ限ニアラサルヤ若シ扣除スヘカラサル者トセハ後發ノ罪ニ依リ受ケタル刑執行濟ノ後大審院ニテ上告ヲ棄却セラレ又ハ前判ノ刑期ヨリ輕キ重禁錮二月ニ處スルノ言渡アリタルトキノ如キハ前後併セテ七月ノ拘束ヲ爲スニ至リ被刑者ニ於テハ其不利益尠カラス且刑法第百二條ノ精神ニモ戾ル樣被考疑議決乘候條此段請訓候也

司法省內訓　明治十六年十月九日

請訓ノ趣前段見解ノ通

●逢警罪犯誤裁判改正之儀ニ付伺指令

明治十六年十月二十九日　神奈川縣伺

逢警罪犯トシテ科料又ハ拘留ノ刑ニ處シタル者其裁判全ク過誤ニ出テ入ルニ失シタル事確然タル時ハ便宜ノ手續ヲ以テ前裁判ヲ改正致シ不苦候哉

司法省指令　明治十六年十一月二日

伺ノ通

●繼續犯罪疑義ノ請訓

明治十六年十月十日　根室輕罪裁判所檢事請訓

茲ニ新法實施以前ニ在テ屬籍氏名ヲ詐稱シ娼妓營業免狀鑑札ヲ受其鑑札ハ一旦上納シタルモ又其前詐稱セシ屬籍氏名ヲ名乘リ同シク又新法實施以前娼妓營業免狀鑑札ヲ受其營業中即チ新法實施後ニ至リ該鑑札面ノ屬籍氏名字形等ノ既ニ消滅ニ歸セント慮ハカリ再度其筋ヘ書替改貰ヒ受ケタル後チ該屬籍氏名等ハ全ク是迄詐稱シ居タリト自首スル被告事件ノ如キハ一寸繼續犯罪ノ如シト雖モ之ヲ熟考スルニ於テハ固ト其屬籍氏名ヲ詐稱シ其他詐欺ノ所爲ヲ以テ免狀鑑札ヲ受クル罪ノ如キハ既ニ其鑑札ヲ受ケタルトキ其罪ノ成立タル者ニシテ何ソ新法實施後ニ及ホシテ娼妓營業シタルト否トニ關スルノ理アランヤ又其新法實施ノ以前ニ在テ受ケタル免狀鑑札面ノ文字等新法實施ノ後ニ至リ殆ト其消滅ニ歸サンヿヲ慮カリ其筋ヘ書替改貰受ケタル所爲ノ如キモ固ト惡意ヲ以テ更ニ屬籍氏名ヲ詐稱シ書替改メヲ爲シタル者ニアラサレハ敢テ新法ヲ以テ論スヘキノ限ニ非ストセン歟果ノ然ラハ則繼續犯罪ニ非スシテ刑法第

三條ニ依リ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從フテ處斷可然ト考量スルモ如此犯罪ハ繼續犯罪ナルヲ以テ新法ノミニテ罰ス可キモノナリトノ論アリ疑義ヲ生シ候間相伺候條何分ノ御訓示相成度此段御內訓奉仰候也

司法省內訓　明治十六年十一月九日

請訓之趣ハ前段見解ノ通

但新法實施後詐稱ノ氏名ヲ以テ鑑札書替願出タル廉ハ刑法第二百三十一條ニ依リ處分スヘシ

●姦罪ニ對スル棄權ハ請訓　明治十六年十一月一日　高知始審裁判所檢事請訓

玆ニ一ノ犯姦既ニ處斷ヲ經當時上告中ニ係レル者ニ對シ姦婦ノ本夫ヨリ其姦夫ニ對スル告訴ニ限リ棄權致度旨願出タルモノアリ右ハ裁判言渡以前トモ蓋シ言渡以後ニ係ルモノハ裁判未確定ト雖モ無論公訴ヲ消滅スルノ力ナク又假令言渡以前ト雖モ所謂犯姦ノ如キニ至テハ即チ二人一罪ヲ爲シタルモノニテ一半ヲ問ヒ一半ヲ措クノ理ナキヲ以テ姦夫一人ニ限リタル願下ハ棄權ノ効ナキモノト相心得候得共其分界上ニ於テ聊疑義ヲ生シ候ニ付何分之御指揮相成度此段仰御內訓候也

司法省內訓　明治十六年十一月十五日

請訓ノ趣姦夫ニ對シ棄權ヲ爲シタルトキハ姦婦ニ對スル告訴モ從テ消滅ス但裁判言渡後ハ棄權スルモ其効ナキ者トス此旨及內訓候也

●公訴私訴期滿免除ノ儀ニ付請訓　明治十六年十一月六日　神戸始審裁判所檢事請訓

第一條

期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算スト雖モ新法實施以前ノ犯罪ニ付テハ明治十四年十二月卅一日迄ハ其期限ヲ中斷シタルト同一ノモノトス但前後通算ノ法ハ治罪法第十四條第二項但書ノ通リタルヘシ云々先般上田始審裁判所ノ伺ニ對シ御指令相成且一般ヘモ御達相成候處右御指令ノ趣意ハ例ヘハ明治十四年十二月卅一日迄ニ既ニ滿六年ヲ經過シタルモノト雖モ新法御實施ノ日ヨリ滿三ケ年間ハ之ヲ罰スルヿヲ得ルノ儀ニ可有之哉又ハ其犯罪ノ日ヨリ新法御實施ノ日迄既ニ滿六年ノ期限ヲ經過シタルモノハ公訴ヲ免カレ候儀ニ可有之哉

第二條

新法御實施前ノ犯罪公訴期滿免除ノ期限起算方ノ儀前條初項ノ解釋ノ如キニ候ハヽ被害者ノ不利稍々薄シト雖モ若シ後項ノ如キニ候ハヽ被害者ニ於テ俄然一大不幸ヲ被ルノ恐レ不少ト考量致シ候何トナレハ舊法施行ノ際ニ在テハ假令數年ヲ經過シ舊惡減免ニ依リ罰ヲ免カルヽモノト雖モ被害者其犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル事實ヲ告訴シ其證充分ニシテ且賍品賊手ニアルトキハ法官追徵シテ被害者ニ還付スルノ成例ニ有之候處新法御實施公訴私訴期滿免除ノ制ヲ被設候カ爲メ舊法ノ際犯罪ニ因テ害ヲ被リタル者其物件假令賊手ニアル顯然タル犯罪ヲ原由トシテ之ヲ告訴スルヲ得ス何トナレハ治罪法第十二條ニ依レハ公訴私訴共ニ期滿免除ノ期ヲ同シフスレハナリ抑モ賍物返還ノ訴ノ如キハ刑事ニ附帶スルモ素民法ノ原則ニ從ヒ支配スヘキモノナレハ假令新法舊法ヨリ輕キヲ以テ舊犯罪ニ公訴期滿免除ヲ適用スルヲ得ルモ賍物返還ノ訴ニマテ新法ヲ適施スルハ法理上不可ナルノミナラス實際上大ニ被害者ノ不幸尠カラスト存候依テ新法御實施前ニ在テ犯罪ノ爲メ害ヲ受ケタル者ハ其賍品現存スルトキハ賊手ニ在ルト否トヲ問ハス（例ヒハ詐欺ノ手段ニ係リ奪取サレタル地所家作船舶ノ類）其罰判然タルモノハ公訴ノ期滿免除ニ拘ハラス賍物追徵ノ處分總テ舊法ノ手續ニテ取扱候樣致シ度ト思考仕候

御實施ノ日迄既ニ滿六年ノ期限ヲ經過シタルモノハ公訴ヲ免カレ候儀ニ可有之哉

第三條

若シ前條ニ陳述セル如ク私訴滿期免除ニ付テハ新法御實施以前ノ被害事件ニ類ラサル儀ニ有之候得ハ舊法賍物追徵處分ノ如ク刑事裁判所ニ於テ取扱候方頗ル便益ト被考候得共果シテ刑事裁判所ニ於テ處分シ可然哉

司法省內訓　明治十六年十一月十七日

請訓ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條　後段見解ノ通但舊惡減免例圖ニ照シ減免ニ係ル者ハ期滿免除ノ期限ヲ經過セスト雖モ仍ホ舊法ニ依リ減免ス

第二條第三條　舊法ノ舊悪減免ニ該ル ヘキ場合ハ治罪法第三百六條ノ旨意ニ依リ私訴ノ裁判モ併テ刑事裁判所ニ於テ之ヲ爲スヿヲ得ルモ若シ新法ノ期滿免除ニ該ル ヘキ場合ニシテ本案ノ辯論終結前ニ在テ免訴スヘキ時ハ刑事裁判所ニ於テ其私訴ニ付テノ裁判ヲ爲ス可ラサルニ付民事原告人ハ更ニ民事裁判所ニ出訴セサル可カラス

●重罪裁判言渡ノ際辨護人出廷セサル片取扱方伺指令

明治十六年十一月二十九日
東京控訴裁判所檢事伺

當重罪裁判所ニ於テ裁判宣告ノ際ニ當リ被告人ヨリ選任シタル代人ニモアラス又辯護人ノ資格ヲ有スル代人ニモアラス唯一箇ノ人民ニシテ辯護人ノ代人ト爲リ辯護人ノ席ト定メタル其席ニ就カシメ裁判官モ之ヲ退ケス其儘ニシテ宣告スルヿ往々有之右ハ啻法廷ヲ汚スノミナラス被告其人ノ爲メニモ利益ヲ見ス又治罪法ノ精神ニモ違背スヘシト思考セリ抑辯護人ノ職務ハ裁判ノ始メヨリ其結局ニ至ルマテ被告其人ノ爲メ辯護スヘキモノナレハ裁判ノ結果如何ナルヲ聽キ辯護ト相反シ不當ト認メタルトキハ被告人ヲシテ上告セシムルノ權アリ然ルニ裁判宣告ノ際辯護人ヲ置カサレハ被告人ニ於テ其宣告ヲ聞遂又ハ聞落ナキヲ保シ難シ遂ニ多少ノ利益ヲ失フヿアルヘシ何トナレハ裁判宣告ハ被告其人ニ取リテ最モ緊要ノ時間ナリ辯護人ノ辯論モ此ニ至テ始テ有効無効ヲ知ルニ足ルモノナリ故ニ辯護人ハ唯事實辯論ト法律辯論トノミニ止マラス裁判終局ニ至ル迄被告其人ノ爲メニ利益ヲ謀リ上告スヘキハ上告モ爲サシムヘシ治罪法第三百八十一條第一項ノ明文ノミヲ以テ論スレハ辯護人ハ唯辯論ヲ爲ス時ニ限ルモノヽ如シト雖モ法廷上ノ体裁ヨリ見ルモ辯護人ノ資格ヨリ論スルモ公判終局迄ハ辯護人其席ニ就クヲ以テ治罪法ノ精神ト謂ハサルヲ得ス何等關係モナキ一箇ノ人民ヲ代人ト爲シ辯護人ノ席ニ就カシムルニ至テハ啻法廷ヲ汚スノミナラス被告其人ニ取テ毫モ利益ヲ見ス故ニ裁判宣告ノ當日辯護人疾病等ニ罹リ出廷シ難キトキハ辯護人ノ資格ヲ有スル者ヲシテ代人ト爲シ出廷セシメ候得ハ治罪法ノ精神ニモ相適シ可申ト存候右ハ如何相心得可然哉至急御指揮ヲ仰キ候也

司法省指令　明治十六年十二月四日

伺之通

●答辯書等差出方期限之儀ニ付伺指令

明治十六年十二月五日
前橋始審裁判所檢事伺

甲裁判所ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ欠席言渡ヲ受ケタル被告人其公判前乙地ニ於テ又重罪ヲ犯シ逮捕セラレタル際欠席言渡アリタルヿヲ知リ該言渡ニ對スル故障ヲ乙裁判所ニ爲シタル內ハ勿論乙裁判所ニ於テ之カ判決ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ對手人ヨリ差出スヘキ答辯書等ノ期限ハ甲裁判所ヨリ故障ニ關スル一件書類ノ送致アリタルヨリ起算スル儀ト相心得可然ヤ此段相伺候也

司法省指令　明治十六年十二月廿日

別紙伺ノ趣豫審ノ言渡ハ其謄本ヲ被告人ノ住所ニ送達シタル後治罪法第二百四十七條ノ期限ヲ經過スレハ被告人ニ於テ之ヲ知ルト否トヲ問ハス確定スヘキ者ニ付伺面ノ如キ場合ハ實際甚タ少ナカルヘシト雖モ若シ確定前其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿアラハ十五年本省丙第七號達ニ依リ乙裁判所ニ於テ後犯ノ罪ト共ニ之ヲ判決スルヿヲ得ルハ見込ノ通此場合ニ於テハ甲裁判所ニ照會シ該書類ノ送致アルヲ俟テ書記ヨリ其書類ト共ニ被告人ノ差出セシ趣意書ヲ檢察官ヘ送致スヘキ者ト心得可シ

●司法警察官ニ於テ既決囚訊問ノ儀ニ付請訓

明治十六年十一月二十六日
京都始審裁判所檢事請訓

第一條　司法警察官ニ於テ現行犯現行犯罪人ヲ訊問スルニ其共犯者他ノ犯罪ニ依リ現ニ既決監ニ在リ訊問ヲ要スル場合ニ於テハ別ニ令狀ヲ要セス司法警察官ヨリ該囚護送方ヲ監獄署ヘ照會シ監獄署ニ於テハ右照會書ニ依リ護送ス可キ者ニ有之候哉將タ勾引狀ヲ發シ引致セシメ訊問ス可キ儀ニ可有之哉

第二條　司法警察官ニ於テ事實參考ノ爲メ既決囚ノ陳述ヲ聞カントスル時ハ該囚讞送方監獄署ヘ照會スヘキモノニ有之候哉將タ報知書ヲ監獄署ヘ送致シ監獄署ニ於テハ其報知書ヲ本人ヘ下付シタル上無論護送ス可キモノニ可有之哉

右仰內訓候也

司法省內訓　明治十六年十二月五日

第一條　後段見解ノ通
第二條　前段見解ノ通

●治罪法第二百三十四條ノ件ニ付伺指令　明治十六年十二月四日　長野縣伺

被告事件ニ付拘留狀ヲ以テ拘留中ノ者十日ヲ經過スルモ豫審判事ニ於テ收監狀ヲ不發又責付ヲモ不許依然打捨置キ候場合ニ於テハ司獄官吏ニ於テ被告人ヲ釋放スヘキヤ將タ發スヘキ令狀ヲ發セサル時治罪法第二百三十四條ノ規則ニ依リ被告人ニ於テ故障ヲ爲スヿヲ得ルニ止リ假令拘留狀期限ヨリ幾日經過スルモ依然拘束致置クヘキモノナルヤ疑義ヲ生シ候ニ付至急何分ノ御明示相成度此段及請訓候也

司法省內訓　明治十六年十二月廿日

別紙請訓ノ趣豫審判事ニ於テ收監狀ヲ發セス又責付ヲ爲サヽル時ハ司獄官吏ヨリ檢事又ハ豫審判事ニ期限經過ノ旨ヲ通知スヘシ此旨及內訓候也

●違警罪上告ノ請訓　明治十六年十二月三日　山形聽罪裁判所請訓

違警罪上告ノ儀ニ付本年六月渡邊檢事長ヨリノ伺ニ對シ罪行法律規則ニ依リ拘留科料ニ處スル者ト雖モ本刑ノ長期多數聽罪ノ範圍內ニ在ルモノハ上告ヲ爲スヿヲ得ヘシ但書ハ長短各寡數共全ク違警罪ノ範圍ニ在ルモノハ見込ノ通リト御內訓相成候處例ヘハ證券印稅規則第四則第二條ニ該ルモノニシテ脫稅高壹錢ノ十倍若シクハ二十倍ノ科料金拾錢或ハ二拾錢ニ處スヘキモノナルトキハ上告ヲ許サレサル儀ニ可有之哉又ハ其多數摘發ナキモ所犯ノ事實ニ依リ數百圓ニ至ルモノニ付全違警罪ノ範圍內ニ在ラサルモノト解釋致シ可然哉此段仰御內訓候也

司法省內訓　明治十六年十二月廿一日

請訓ノ趣前段見解之通但脫稅多額ニシテ貳圓以上ノ罰金ニ該ル可キ者ナルトキハ上告ヲ爲スヿヲ得ヘシ

●死刑ノ宣告ヲ受ケタル者病氣ノ節執行方疑義ノ廉ニ付伺指令　明治十六年二月四日　群馬縣伺

茲ニ死刑ヲ執行スヘキ者當時病痢窒扶斯或ハ腸膜炎ノ類ニ罹リ更ニ人事ヲ省ミサルカ如キ受刑者アラン此際直ニ執行ヲ爲スハ却テ刑罰ノ本旨ニ忤ロ少シク妥當ナラサルヲ覺フ因テ右ノ場合ニ於テハ其執行ヲ停止シ假令痊治ニ至ラサルモ幾分ノ本復ヲ待チ執行スヘキ儀ト相心得可然哉法章上明文無之ニ付相伺候也

司法省指令　明治十六年十二月廿四日

伺ノ趣死刑ノ執行ヲ受クヘキ者疾病ニ罹リ人事ヲ辨セサル時檢察官ニ於テ其執行ヲ爲スヘカラスト認メタルトキハ伺之通

但執行ヲ爲スニ差支ナキニ至リ之ヲ執行スルモ亦タ檢察官ノ指揮ニ依ル儀ト心得ヘシ

●哀訴期限ノ儀ニ付伺指令　明治十六年十二月十七日　京都府伺

刑ノ執行停止ノ儀ニ付本年九月廿六日京都始審裁判所檢事請訓ニ對シ御訓示ノ次第モ存之候處右ニテハ當府ノ如キ大審院ト所在地ヲ異ニスル土地ニ在リテハ治罪法第四百三拾八條ニアル處ノ三日間ハ右言渡書送達ノ時間中ニ已ニ經過シ被告人ニ送達スルヤ否直ニ刑ノ執行ヲセサルヿヲ得サルカ如キ場合アリテ甚タ不穩當ト相考候付テハ右御訓示ノ旨趣ハ大審院ノ言渡ノ原裁判所等ニ著シ之レヲ被告人ニ送達ナリシ翌日ヨリ三日間ヲ經テ刑ヲ執行スヘキモノト相心得可然哉疑義ヲ生シ候ニ付何分ノ御指令相成度此段相伺候也

司法省指令　明治十六年十二月廿八日

伺ノ趣哀訴ハ大審院言渡ノ翌日ヨリ起算スヘキニ付本人ヨリ同院ヘ代言人ヲ差出シ置クカ又ハ重罪事件ニ係リ同院ヨリ其代言人ヲ撰任セシ場合ニ非サレハ之ヲ爲スヿヲ得サルモノトス

●證據物品處分方之儀ニ付伺指令　明治十六年十二月五日　樺戸集治監伺

第一條　已決囚徒人監ノ節所持ノ物品ヲ情願ニ任セ司獄官吏ヨリ他ニ賣却シタル後餘罪發覺シ右物品ハ曩ニ犯罪ノ用ニ供シタルモノナル時ハ其公商公賣ニアラサルモノヿヲ買取ルト雖モ沒收スルノ限ニ無之候哉

第二條　總テ證據物品裁判所ノ管轄地外ニアルトキハ其管轄裁判所ニ囑託シ送付ヲ求メ可然哉又其送付費用ハ何レノ裁判所ニテ支辨シ可然哉

第三條　前條送付シタル物品裁判濟ノ上還付ノ言渡ヲ爲シタル時其言渡ヲ受クル者裁判所ノ管轄地外ニ在ルトキハ其所轄裁判所ヘ囑託シ還送致可然哉果ノ然ラハ其運送費ハ何レノ裁判所ヨリ支辨ス可キ儀ニ候哉

右相伺候條至急御裁令相成度候也

司法省指令　明治十七年一月十一日

第一條　見込ノ通

第二條　治罪法第六十一條ニ從ヒ司法警察官檢察官又ハ裁判官ニ囑託スルヿヲ得但送付費用ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨ス可キモノトス

第三條　囑託ヲ爲ス迄ノ運送費ハ其官署ニ於テ支辨シ囑託ヲ爲シタル以後ノ運送費ハ囑託ヲ受ケタル官署ニ於テ支辨ス可シ

●租稅官吏職務上家宅搜查ノ儀ニ付伺指令　明治十七年一月十日（電報）長崎縣伺

客年第四十三號公布ニヨリ主任官吏犯則ノ證憑取調ルトキ本人拒ムトモ家宅倉庫ヲ搜査スルノ權アリヤ

司法省指令　明治十七年一月十四日

客年第四十三號公布ニ依リ家宅倉庫搜查ノ件ハ伺ノ通

●豫審終結ノ條項ニ付請訓　明治十六年十二月十日　大阪控訴裁判所檢事請訓

凡ソ公訴ノ豫審タルヤ每常極メテ難懸疑獄ニ係リ務メテ鄭重愼密ナ旨トシ要スルニ被告事件ノ證據徵憑ヲ集取シ以テ充分ノ證憑アルヤ否ヲ判決スルノ一點ニ外ナラス然リ而シテ其集取シタル數個ノ證憑中必スヤ信否取捨一ナラスシテ之レカ判決ヲ與フルヤ精確ニ心證ノ資料ヲ擇フヒ事實ノ眞據ヲ明カニシ判決ノ理由ヲ示シ以テ裁判ノ公平無偏ヲ保チ須ラク證憑曖昧ノ間ニ事實ヲ誤リ無辜ノ民ヲシテ不幸ノ害ニ陷ラシメサルヲ要ス可キ者タルヤ言ヲ俟タス然ルニ當曩所轄ノ各裁判所ニ於テ間ニハ豫審ノ言渡書中證憑ノ事項ヲ明示セス單ニ證憑充分トノミ略記スル者有之是等ハ何ノ證憑ニ依テ充分ナリト判定シタルヤ渾然トシテ其必信ノ證據更ニ知了スルニ由ナク乃チ檢察官ニ於テハ犯罪ヲ證明スルノ資料ヲ擇フニ頗ハシク被告人ニ於テハ自護ノ反證ヲ照考スルノ便ヲ缺キ被告人ノ幸不幸ヲ來タス而已ナラス公衆ノ危險モ亦尠ナシトセス旁々不都合ヲ生スルヲ覺フ抑モ治罪法第二百二十八條末項ニ違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣證憑ノ充分ナルヿ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シト有之夫レ本條ノ精神タルヤ證憑ノ充分ナルヿヲ明示スル最モ緊要肝ニシテ所謂證憑充分ナルヿヲ明示ストハ決シテ證憑充分トノミ單示スルノ謂ニ非ラスシテ必ス證憑ノ事項ヲ明確ニ臚列明示スルノ謂ニ外ナラサル可シ茲ニ當總ノ所轄中ニ於テ過半ハ本議同感ノ者有之ト雖ニ三ノ裁判所ニ在テ前顯ノ如キ證憑略記ノ判文ヲ用ヒ反テ簡便ニシテ適法ナリト主張スルモ有之是レ必竟法律ノ見解ヲ異ニシ且手續ノ鄭重簡易ノ兩主義互ニ相背馳スルニ之レ職由セン固ヨリ當總ニ於テハ一同本議ニ異論無之ト雖モ他ノ各裁判所ニ在テハ議論異同有之抑亦豫審判事ノ判決ニ於テ證憑ノ取舍信否ノ異同之レ有ルハ格別ナルモ判決ノ言渡書ニ其心證ノ資料即チ豫審ノ必要タル證憑ノ事項ヲ明示スルト否ラサルトノ異同有之一定ノ制規無之ハ頗ル不都合ト謂ハサルヲ得ス倘シ或ハ謂ハン是等ノ異同有ルモ法律上敢テ妨ケナシトシ猶ホ各自ノ意見ニ放任シ去ラハ恐クハ豫審ノ處分自然荒疎ニ傾キ泛濫ニ流レ如何ナル弊害ヲ生センモ難測就テハ假令ヒ法律上明文アルニ非スト謂フモ前顯通治罪法第二百二十八條末項ノ精神ニ繹ヌルニ必ス證憑ノ事項ヲ明示スルヲ以テ元則トセン最モ實際ノ利害ニ試ミ以テ本議ヲ是認セサルヲ得ス就テハ前陳ノ如ク議論兩岐ニ渉リ終結一定致サヽル義ニ付御內訓ヲ仰キ候條何分御垂示被成下度此段稟請候也

司法省內訓　明治十六年十二月廿八日

請訓ノ趣豫審ノ言渡書ト公判ノ言渡書トハ自然其趣ヲ異ニスル者ニ付キ治罪法第二百二十八條末項ニ定メタル言渡書ハ犯罪ノ性質摸樣ノ如キハ成ル可ク明白ニ記載スルヲ要ス可シト雖モ證憑ニ至テハ一々明示スルニ及ハス其證憑ノ充分ナルヿヲ記載スルヲ以テ足レリトス此旨及內訓候也

●附帶私訴之儀ニ付請訓　十七年三月七日　秋田始審裁判所檢事請訓

詐欺取財事件ニ付甲裁判所ニ於テ公訴私訴ヲ併セテ裁判ヲナシタル處被告ハ其裁判ニ不服シテ上告ヲナシタリ然ル

ニ大審院ニ於テハ法律ニ依リ理由ヲ付セサリシハ不法ナリトシ其全部ヲ破毀シ更ニ乙裁判所ニ移サレタルヲ以テ乙裁判所ハ本按詐欺取財事件ニ付テハ公訴私訴併セテ適當ノ判決ヲナサヽルヘカラサルハ論ヲ待タサル義ト被相考如何トナレハ原裁判ノ全部ヲ破毀セラルレハ即原裁判ノ無効ニ屬スルヲ以テナリ然ルニ反對ノ論者アリ大審院ニ於テ原裁判ノ全部ヲ破毀シタル刑事ノ公訴ニ對スル裁判ノミニシテ私訴ニ及ハサルモノナレハ乙裁判所ハ刑事ノ公訴ニ對スル判決ヲ爲スニ止マリ私訴ノ裁判ヲ與フルノ限リニアラサル旨主張スト雖モ刑事ニ附帶シテ刑事裁判所ニ私訴チナシタル場合ハ即チ本按裁判ノ無効ニ屬セハ隨テ從タル附帶ノ私訴モ効力ヲ失スルハ當然ナルヲ以テ乙裁判所ハ大審院ノ破毀ニ係ル公訴私訴ヲ併セ判決ヲナスハ至當ト存候得共爲念御内測ヲ仰候也

但シ被告等カ上告ノ當時ハ殊更私訴ノ裁判ニ對シ何等申立サル義ニ付御參考迄申添候也

司法省内訓　明治十七年三月廿四日

請訓ノ趣ハ乙裁判所ニ於テ更ニ私訴ノ裁判ヲ爲スニ及ハス此旨及内訓候也

●重罪被告人ニ對スル接見願ニ付伺指令

明治十七年三月十日
大阪控訴裁判所檢事伺

重罪被告事件ニ付豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ治罪法第二百二十七條ニ從ヒ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置シ檢事ニ於テハ右言渡確定シタル時ハ治罪法第二百六十條ニ從ヒ其言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ニ於テハ重罪裁判所開廷ノ期ニ至リ治罪法第六十條第二項ニ從ヒ被告人ヲ某重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命スルノ手續ニ有之處茲ニ豫審判事ニ於テ之ヲ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ確定ノ上檢事ヨリ書類ヲ檢事長ニ送致シ未タ重罪裁判所開廷ノ期ニ至ラスシテ被告人ハ仍ホ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ留置中其親屬等被告人ト面接願ヲ申請シタル者アランニ治罪法第三百八十二條第三項ニ依ルニ辯護人ヲ除クノ外何人ト雖重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラスト有之就テハ右但書ニ被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所トアルハ譬ヘハ前類ノ如ク豫審ノ言渡確定スルモ未タ管轄重罪裁判所開廷ノ期ニ至ラス單ニ書類ノミ檢事長ニ送致シ被告人ハ猶ホ原裁判所管内ノ監倉ニ留置ノ場合ニ在テハ原裁判所即チ豫審ヲ爲シタル輕罪裁判所長ノ允許ヲ受クル儀ナルヤ果シテ然ラハ該裁判所長ニ在テハ固ヨリ其管掌ニ屬セサル事件而已ナラス其被告事件ノ何タルヤ未タ曾テ與カリ知ラスシテ且ツ書類モ既ニ檢事長ニ送致シアル者ナレハ該裁判所長ニ於テハ之ヲ許否スルニ由ナキ者ト慮考セリ又未タ重罪裁判所開廷ノ期ニ至ラサルモ檢事長ノ指揮ニ依リ豫テ被告人ヲ其開廷ス可キ重罪裁判所ノ下ト云ヘル監倉ニ移シ留置シ猶ホ未タ重罪裁判所開廷セサル場合ハ何レノ裁判所長ニ於テ之レカ允許ヲ得ル儀ニ有之哉若クハ猶ホ原裁判所即チ輕罪裁判所長ノ允許ヲ受ルノ手續ナル哉

司法省指令　明治十七年三月廿五日

伺ノ趣被告人豫審ヲ受ケタル裁判所附ノ監倉ニ在ル時ハ其裁判所長ノ允許ヲ受ケ已ニ開廷スヘキ重罪裁判所附ノ監倉ニ移シタル時ハ其開廷スヘキ始審又ハ控訴裁判所長ノ允許ヲ受クル儀ト心得可シ

●官吏ノ職務ニ對シ文書ヲ送致ノ侮辱スル者ノ儀ニ付伺指令

明治十七年三月十日
山形始審裁判所酒田支廳檢事伺

官吏ノ職務ニ對シ文書ヲ直チニ其官吏ニ送致シ以テ侮辱シタル者法律ニ明文無之候處右ハ筆記セシ言語ナリトシ又直接之ヲ送致シタルヲ以テ目前ニ於テ爲セルト同一ナリトスル時ハ刑法第百四十一條初項ヲ以テ論ス可シト雖モ已ニ紙上ニ移シタル上ハ即文書ノ名ヲ命ス可クシテ之ヲ言語ト云フ可カラス又假令直接之ヲ送致スルモ其身全ク外ニ在レハ之ヲ目前ノ所爲ト云フ可カラサレハ該項ニ依ル可キモノニ非サル可シ然ルニ同條ノ次項ナル其目前ニ非ストモ刑行ノ文書ヲ以テ侮辱スト云ヘル其刑行ノ文字ハ即印刷發行ノ二事ニシテ必ス印刷シテ以テ世上ニ公行スルモノヲ云フカ如クナリト雖モ文書ハ必スシモ印刷ヲ要セス手書シタルモノモ亦之ニ含蓄セハ又必スシモ廣ク世上ニ發行スルモノヽミナラス直ニ其官吏ニ送致スル者モ亦含蓄シタルモノニシテ該項ニ依リ論ス可キモノニ候哉又ハ假令其官吏ニ送致スルモ唯要方間ニ在ルノミニシテ他人ニ漏泄セサルモノナレハ該項ニ含蓄セス到底刑法第二條ニ依リ論スルヿヲ得サル儀ニ候哉

司法省指令　明治十七年三月廿八日

伺ノ趣刑法第百四十一條第一項ニ依リ處分スル儀ト心得ヘシ

●刑法附帶ノ私訴裁判言渡ニ對シ控訴ノ請訓　明治十七年四月二日　秋田始審裁判所檢事請訓

茲ニ告訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲シタル被告事件アリ裁判官其公訴ヲ裁判シタル後私訴ノ裁判ヲ爲スニ當リ檢察官ニ通報ヲ爲サヽル故同官ノ立會ナクシテ私訴ノ裁判ヲ言渡シタリ此卽チ治罪法第三十五條ノ法典ニ背キタルヲ以テ檢察官ニ於テ同法第三百六十五條第四項越權ノ處置アルヲ理由トシ控訴ヲ爲シ得ルハ勿論ト存候得共同法第三百六十五條第四項ハ刑ノ言渡ニ關シ越權等ノ處分アリタル場合ニ限リ適用スヘキモノニシテ檢察官カ刑事附帶ノ私訴裁判言渡ニ對シ控訴スルカ如キハ本項ノ規定スル所ニアラスト云フ反對論者アリ聊カ疑義ニ涉リ乞御內訓候也

司法省內訓　明治十七年四月十七日

請訓ノ趣ハ後段解釋ノ通此旨及內訓候也

●死者ニ對スル再審ノ訴ニ付請訓　明治十七年四月十五日　大審院檢事長請訓

治罪法第四百四十條第五ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬ヨリ再審ノ訴ヲナシ得ヘキ旨ヲ規定セラレ其第四百四十六條ニ於テハ死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲナシタル場合ニ於テ云々ト記載シアツテ檢察官ヨリ再審ノ訴ヲ起シタル場合ノ規定アルヿナケレハ該文面上ヨリ之レヲ見ルトキハ死者ニ對スル再審ノ訴ハ其親屬ニ非サレハナシ得ヘカラサル者ノ如ク解釋セラレ候得共既ニ其親屬ニ於テ訴權ヲ有スル以上ハ檢察官ニ於テモ訴權ヲ有スルノ道理ナレハ聊カ疑義ニ涉リ相決シ兼候ニ付御內訓ヲ仰キ候也

司法省內訓　明治十七年四月二十一日

請訓之趣檢察官ニ於テモ再審ノ訴ヲ爲スヿヲ得可キ儀ト心得可シ此旨及內訓候也

●他ノ裁判所ヘ移サレタル被告人送致ノ手續及保釋取消等ノ儀ニ付請訓　明治十七年四月十日　岡山始審裁判所檢事請訓

第一條　甲裁判所ノ重罪公判ニ對シ上告ヲナシ大審院ニ於テ之ヲ破毀シ乙裁判所ニ移サレタル時ノ場合被告事件一切ノ書類ヲ送致スヘキ手續別段ノ正條ナキヲ以テ或ハ甲裁判所ヨリ直チニ其移サレタル乙裁判所ノ管轄檢事長ヘ送致スルモアリ或ハ乙裁判所ノ檢事ヘ被告人ト共ニ送致シ乙裁判所ノ檢事ニ於テ更ニ治罪法第二百六十條ノ例ニ原キ其控訴裁判所檢事長ヘ送致スルモアリ其取扱區々ニ有之輕罪ニ於テハ原裁判所ヨリ直チニ其移サレタル裁判所ヘ送致スルヲ以テ例トナスモ重罪事件ニ於テハ必檢事長ヲ經サルヘカラサルモノニ付何レノ手續ニ從フヘキヤ前說ノ如キハ其管轄ニアラサル裁判所ヨリ他ノ管轄ノ檢事長ヘ送致スルハ或ハ事ノ順序ヲ逐ハサルモノヽ如シ然ラハ後說ノ手續ニ從フヲ以テ穩當トナス乎

第二條　輕罪事件上告中被告人ヲ保釋又ハ賈付シタル場合破毀ノ上他ノ裁判所ニ移サレタルトキハ其賈付保釋ハ當然取消ヘタルモノトシ更ニ勾留ノ上一件書類ト共ニ送致スヘキモノナル哉

右仰御內訓候也

司法省內訓　明治十七年五月十日

請訓ノ趣第一條ハ甲裁判所檢察官ヨリ直ニ乙裁判所ヲ開ク可キ裁判所ノ檢察官ニ送致ス可シ第二條原裁判所ニ於テ保釋賈付ノ取消ヲ必要トスルトキハ之ヲ取消スハ勿論ナレトモ當然取消シタル者ト爲スヿヲ得ス

●輕罪控訴期限ニ付請訓　明治十八年一月八日（電報）　神戶始審裁判所檢事請訓

刑事控訴期限ハ五日ナルニ付キ第貳號布告御發令前刑ノ言渡ヲ受ケ五日ヲ經過セサルモノモ控訴スルコトヲ得ルヤ直ク御指揮ヲ仰ク

司法省內訓　明治十八年一月十四日（電報）

一月八日付電報請訓ノ趣本年第貳號布告施行前刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ上告期限ヲ經過セサルトキハ期限內ニ控訴スルヲ得ヘシ

●控訴ニ係ル裁判執行ノ儀ニ付伺指令　明治十八年一月二十七日　松山始審裁判所檢事伺

本年第貳號布告ヲ以テ輕罪ノ控訴ヲ許サレ隨テ同布告第三條第四條ニ規定セラルヘ豫納金ノ處措ヲ按スルニ當リ先ツ控訴ニ係ル裁判ノ執行ハ何レノ裁判所ニ於テナスヘキヤヲ決スルノ要アルヲ知レリ茲ニ至テ論議二派ニ出テ即甲論者ハ凡ソ刑ノ執行ハ治罪法第四百六拾貳條ニ定メラルヘ如ク原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ爲スヘキモノニシテ控訴裁判所ニ對スル原裁判所ハ即チ始審裁判所ナリ故ニ控訴裁判ノ執行ハ原裁判所即チ始審裁判所ニ於テナスヘキモノナリ然ラサレハ控訴ハ時アリテ原裁判ヲ認可スル場合アルノミナラス彼ノ豫納金ヲ收領スルハ無論原裁判所即チ始審裁判所タラサルヘカラス加之治罪法第四百六拾貳條ハ如何ナル時ト雖モ總テ刑ノ執行ヲナスヘキ場合ヲ定メラレタルモノニシテ汎キ意義ナルニ依リ特リ大審院ニ對スル原裁判所ニアラスシテ始審ノ控訴ニ於ルモ原裁判所即チ始審裁判所ニ於テ執行ヲナスヘキモノナリト乙論者ハ之ニ反シ治罪法第四百六拾貳條ノ原裁判所トハ必竟大審院ニ對スル原裁判所ニシテ控訴裁判所モ亦同院ニ對シテハ即チ原裁判所ナリ何トナレハ控訴裁判ニ對シテ上告ヲナシ大審院ニ於テ棄却又ハ直ニ裁判ノアリシ時ハ控訴裁判所ニ於テ刑ノ執行ヲナスヘキハ勿論ナレハナリ本來刑ノ執行ヲ原裁判所ニ於テ爲スヲ必要ナリトセシ所以ノモノハ上告ノ際大審院ニ於テ棄却シ又ハ直ニ裁判アリシ時同院ニ於テ執行ノ煩ヲ取ラサルヲ要スレハナリ如何トナレハ上告ハ罰金ノ刑ヲ除ノ外ハ悉ク被告人ヲ其院ニ送ラス只辯護人ヲ出スニ止マレハナリ之ニ反シテ控訴ハ必ス被告人ヲ其裁判所ニ護送シ事實ノ審ヲナスヘキニ依リ直ニ刑ノ執行ヲナスニモ毫モ差閊ナキノミナラス却テ被告人ヲ送還スルノ勞費ナク將タ逃走ノ憂ナクシテ實際上大ニ便利ナリト云フヘシ彼ノ豫納金ノ如キハ只之ヲ郵送スルノ手數ヲ要スルノミ現ニ被告人ノ其地ニアリテ執行上更ニ支障ナキニモ拘ハラス故ラニ送還スル等甚タ迂闊ナル手續ヲナスカ如キノ比ニアラサルナリ加ルニ控訴裁判所ヨリ被告人ヲ原裁判所即チ始審裁判所ヘ送リ還スカ如キハ路程ノ永遠行路ノ嶮難ナル場所ニ在テハ又一層ノ不便ヲ感スル所ナリ依テ控訴ニ係ル裁判ノ執行ハ大審院ノ裁判ト異ニシテ直ニ控訴裁判所ニ於テ執行スヘキモノナリト以上兩論ノ派ルヽ所ニ有之候處小官ハ全ク乙論者ノ說ト同一ノ意見ヲ持スルモノニシテ治罪法第四百六拾貳條ノ原裁判所トハ即チ大審院ニ對スル原裁判所ニシテ始審ノ控訴ニ於ルカ如キモノヲ指ス律意ニ非ストス法律ノ見解既ニ此ノ如シ實際上ノ便益モ亦前述ノ如ク然リ勞控訴裁判所ニ於テ直チニ執行スヘキモノト思量致候得共又治罪法第四百六拾貳條ハ實際ノ便否ニ拘ハラス所謂原裁判所トハ特リ大審院ニ對スル場合ナルノミナラス或ハ控訴裁判所ニ對スル場合ヲモ包含スルヤ

司法省指令　明治十八年二月二十四日

伺ノ趣控訴ノ裁判官廳ヲ爲シタル裁判所ニ於テ執行スル儀ト心得可シ

●郡吏員戸長等職務上刑事裁判所ヘ證人トシテ出頭旅費日當請求方ノ伺指令　明治十八年九月四日

千葉縣伺

一郡吏員戸長等職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スルトキハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルヲ得ルハ勿論ノ儀ト存候得共被告事件無罪又ハ免訴トナリタルトキハ明治十七年六月太政官第五十七號公達ニ準シ請求セサル儀ト心得可然哉又ハ右ノ場合ト雖モ郡吏員戸長等ニ在テハ請求スルヲ得ヘキ儀ニ候哉

一前顯太政官第五十七號公達ニハ被告事件無罪又ハ免訴トナリタルトキハ請求セサル儀ト有之候得共治罪法第百九十條ニハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヿヲ得ト有之然レハ被告事件未タ判決ヲ經サル以前ニ在テ之レヲ請求シ置キ無罪又ハ免訴トナリタルトキハ之ヲ受取ラサル儀ト心得可然哉

司法省指令　明治十八年十一月二日

伺之趣第一項前段伺之通第二項伺之通

●違警罪正式裁判ニ係ル訟廷內治罪手續ニ付伺指令　明治十八年十月五日

滋賀縣伺

明治十四年第五十四號布告但書ニ依レハ始審裁判所々在地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判ヲ爲ス際訟廷內治罪ノ手續ハ便宜取計フヿヲ得ル上ハ今般第三十一號布告違警罪即決處分ニ對シ正式ノ裁判ヲ請求シ其裁判ヲ爲ス際訟廷內治罪手續モ亦便宜ニ取計ヒ可然哉尽シテ然ラハ裁判官ト協議ノ上其事件ノ難易ニ依リ檢察官ノ公廷ニ立會ハサルモ敢テ差支無之樣相考候得共違警罪正式裁判ニ係ル訟廷內治罪手續ニ付テハ未タ何等御布告等モ無之ニ付一應

此段相伺候

司法省指令　明治十八年十一月十一日

伺ノ趣治罪法ニ從フ可キ儀ト心得可シ

●無屆遲不參ノ者罰金科料徵收執行ノ件ニ付請訓

明治十八年十月二十日
横濱輕罪裁判所檢事請訓

明治十五年一月三三三號ヲ以テ御內訓中ニ裁判所ノ呼出ニ遲不參セシ者始審裁判所各在ノ地ノ治安裁判所ニ於テ處分シタル時ハ其旨ヲ輕罪裁判所ノ檢事ニ通知ス可シ其通知ヲ受ケタル檢察官ハ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ執行ス可シト有之右ハ畢竟治安裁判所ニ於テ違警罪裁判所ヲ開カサルヨリ從テ檢察官モ之レナキニ依リ輕罪裁判所檢事ニ於テ執行スル事ト規定セラレタル儀ニ可有之候處本年第三十一號御布告ヲ以テ明治十四年第四十四號及ヒ同年第八十號ノ御布告ヲ廢セラレタル上ハ無論右御內訓中治安裁判所ニ於テ處分セシ者ハ爾來違警罪裁判所ノ檢察官ニ於テ執行ス ル儀ト心得可然哉

司法省內訓　明治十八年十一月七日

別紙請訓ノ趣ハ見解ノ通此旨及內訓候也

●公判審問中拘留狀期限經過セシトキ其効力有無ノ伺指令

明治十八年八月五日
警視廳伺

茲ニ輕罪犯アリ檢事ヨリ直ニ公判ニ付シ審問中拘留期限經過シ收監狀ニ換ヘサルヨリ其旨檢事ニ通知セシニ公判ニ付シタル以上ハ關係セスト云ヒ公判事ニ於テハ法律上明文ナシトテ收監狀ヲ發セス又被告人ニ於テ異議ノ申立ヲナシタルニ收監狀ヲ發付スル如キハ總テ被告事件豫審中ノ處分ニ屬シ公判判事ニ於テ之ヲ發スルハ法律ニ規定スル所ナシ然ラハ拘留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ經過スルモ既ニ公判判事ノ管理ニ屬スル以上ハ其効力ノ消滅スルモノニ非スト判決セリ抑拘留十日ヲ過クルヿヲ得サルハ治罪法ニ明文之アリ又檢事ヨリ直ニ公判ニ付シタル事件ニシテ拘留十日ヲ過クルトキハ治罪法第百二十七條第二項ニ從ヒ檢察官ノ請求ニ依リ更ニ十日間拘留ヲナシ又ハ公判判事ニ於テ收監狀ヲ發スルヲ得可キ旨往々御指令有之就テハ公判判事ト雖モ收監狀ヲ發スルヲ得ルハ勿論ニシテ若シ其處

分ヲナサヽルトキハ典獄ニ於テハ令狀ナキ被告人ヲ拘留スル不能ヲ以テ直ニ解放セサルヲ得ス然ニ前顯判決ニ依テ見レハ拘留十日ヲ過クルモ其効力ヲ有スルモノヽ如シ右ハ果シテ効力之アルモノニ候ヤ若シ之ニ反シテ効力ナキモノトセハ前顯ノ如キ判決アリタル場合ニ於テハ如何相心得可然哉

司法省指令　明治十九年四月九日

伺ノ趣被告事件ヲ公判ニ付シタル後ハ治罪法第百二十七條ノ規則ニ據ルヘキモノニアラス即チ裁判宣告ニ至ルマテ拘留狀ノ効力ヲ有スルモノト心得ヘシ

○

第二百八十六　普通治罪法陸海軍治罪法交渉ノ件處分法ヲ制定ス

明治十八年五月廿九日
布告第拾貳號

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從前ノ成規中本則ニ牴觸スルモノハ當分施行セス

第一條　常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條　軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢察官ニ送致スヘシ

第三條　敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條　軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條　多衆ノ軍人常人圍毆殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條　軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

右奉　勅旨布告候事

○

第二百八十七　刑事證人及無罪解放人旅費日當支給方

明治九年五月四日布告第六十三號

明治七年七月第七拾八號同年十一月第百二十七號同八年五月第七十四號布告及同七年七月第九十一號同年十一月第百五十八號達ヲ廢シ證人並無罪解放ノ者等ノ旅費支給方ノ儀今般更ニ左之通相定當五月十六日ヨリ施行候條此旨布告候事

一罪囚ノ證人タルヘキト思量シ裁判官又ハ警察官吏ニ於テ呼出ス者探索上ニテ捕ニ就キ及

呼出ヲ受テ無罪ニ歸スル者人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者（各官廳ヨリ呼出ス者モ亦同シ）有罪ト認メ呼出サヽル者ヘ附添ヲ命スル者往復並滯留中左ノ通支給スヘシ（第九年第百三十二號布告ヲ以テ（裁判官）ノ下六字ヲ增補シ（及）ノ下四字ヲ刪除ス）

但推糾ノ爲メ手鎖繩付等ニテ護送及檻倉入圈中等官費ヲ以仕斯ノ時日ハ別ニ給セス

旅費日當

金五拾錢

滯留日當

金三拾錢

一該廳ヨリ片道二里以上十里迄ハ旅費日當一日分ヲ給シ爾餘一日十里詰ヲ以テ往返共之ヲ給シ滯在中ハ其日數ニ應シ滯留日當ヲ給スヘシ（十里以上ノ端里數一里ニ滿タサルハ切捨トス一里以上ハ旅費日當一日分ヲ給ス）

但片道二里以上滿五里迄ノ地ヲ一日間ニ往來スルモ日當ハ一日分ノ外給セス尤二里未滿ノ地ヨリ呼出セシモノハ辨當料金二錢五厘ヲ給ス（九年第百七號布告ヲ以テ但書ヲ增補ス）

一各裁判所及ヒ警察官吏ヨリ呼出ヲ受テ無罪ニ歸スルモノ人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出タルモノ旅費ハ其呼出シタル廳ヨリ之ヲ給ス其他ハ總テ本管廳（寄留ノモノハ其寄留地管轄廳）ヨリ給スルニ付證人及附添ヲ命スル者等ノ如キハ問糾中ノ日數幷ニ往復里程ヲ詳記シ其裁判官ノ證印ヲ請ケ旅費請取方ヲ申請スヘシ（九年第百三十二號布告ヲ以テ（名裁判所）ノ下割註ヲ除キ（及ヒ警察官吏）ノ六字ヲ加ヘ（其呼出タル）ノ下（裁判所）及割註ヲ刪除シ（廳）ヲ加ヘ又同年第百五十一號布告ヲ以テ（無罪ニ歸スルモノ）ノ下（人違）云々ノ二十四字ヲ加フ）

〔一〕刑事ニ付出庭セシメタル證人鑑定人等ノ日當官廳ニ於テ立換渡スニ及ハス（明治十五年六月二十九日司法省達丙第貳拾五號大審院裁判所督視廳府縣（東京府ヲ除ク））

治罪法第百九十條及第二百條參看

刑法治罪法實施以來刑事ニ付出廷セシメタル證人鑑定人等ノ旅費日當等一時官廳ニ於テ立換渡ヲ爲シ候儀モ有之候處該旅費日當等ハ則裁判費用ニシテ總テ被告人ノ擔當スヘキモノナルハ勿論ノ儀ニ付自今右立換渡ヲ爲スニ不及ル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

但從前ノ指令及ヒ內訓本文ニ抵觸スル件々ハ都テ取消候事

九年內務省第百廿七號達（第七十五ノ四項）ヲ以テ警察官ノ處分ニ依リ支給セシ分ハ警察費ニシテ支辨セシム

治罪法第百九十條參看

〔二〕刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用支給方 明治十七年三月二十五日 內務省達乙第十八號警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

刑事ニ付警察官ノ處分ニ屬スル費用之儀ニ指令又ハ訓示及ヒ置キ候次第モ有之處豫審判事ノ囑託ヲ受ケ豫審處分ヲ爲シタル場合ヲ除ク外ハ起訴ノ前後ニ拘ハラス裁判費用ニ相立タサル儀ニ付之ニ矛盾スル指令及ヒ訓示ハ都テ取消候條支給方ハ明治九年第六十三號公布ニ據ル儀ト可心得此旨相達候事

〔三〕官吏職務上刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時旅費日當請求方 明治十七年六月十三日 太政官達第五十七號院省廳府縣

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖トモ被告事件無罪又ハ免訴トナリタル時ハ請求セサル儀ト心得可シ

但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜收入トシテ大藏省ヘ納付ス可シ

右相達候事

○第二章　治罪特例

第二百八十八　違警罪即決例 明治十八年九月二十四日 布告第三十一號

治罪法第四十九條及第三百廿一條以下參看

明治十四年九月第四十四號布告及ヒ同年十二月第八拾號布告ヲ廢止シ違警罪即決例別紙ノ通制定ス

右奉　勅旨布告候事

（別紙）

違警罪即決例

第一條　警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地內ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條　即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條　即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條　即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齡身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條　正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但

其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條　警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條　第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條　科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條　科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條　拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サヽル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條　保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ沒入シテ本刑ニ換フ

第十二條　留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條　留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

●伺指令

●違警罪事件取扱方ノ請訓　明治十八年十月六日　福島輕罪裁判所若松支廳檢事請訓

本年九月廿四日第三拾壹號ヲ以テ違警罪即決例公布セラレ候ニ付テハ自今違警罪事件ハ總テ一應即決ノ言渡ヲ受シムルモノヽ如ク被相考候乍シテ然ラハ本職又ハ違警罪裁判所檢察官ニ於テ告訴告發其他ノ原由ニヨリ認知シタル違警罪事件ハ必ス警察官ヘ送致スヘキ儀ト相心得可然哉

司法省内訓　明治十八年十一月三十日

別紙請訓之趣見解之通右及内訓候也

●陸軍軍人軍屬違警罪即決處分方ノ伺指令　明治十九年十二月六日　岐阜縣伺

本年五月勅令第四十四號ヲ以テ發布相成タル陸軍軍人軍屬違警罪即決處分ハ警察署ニ於テトアリテ分署ノ文字無之然レヒ其第一條ニ違警罪即決例ニ依リ云々トアルヲ以テ觀レハ即チ明治十八年布告第三十一號ノ規則ニ依ルヿ明ニシテ憲兵部アラサル場所ハ其地ノ警察官即警察署分署ニ於テ處分スルコトヲ得ル儀ト考量候得共成文上警察署ニ限ルモノヽ如ク相見ヘ聊疑團ニ涉候條至急何分之御指令相成度

内務省指令　明治十九年一月十日

書面伺之通

●違警罪即決例執行方ノ伺指令　明治十八年十月十日　長野縣伺

第一條　十四年御省丙第拾九號達中違警罪既決未決事件表ハ客月第三十一號違警罪即決例公布ニ付キテハ自然消滅ノ義ト心得ヘキヤ

第二條　違警罪即決事件ハ客月御省丙第八號達違警罪公判表ヘ如何記載スヘキヤ

第三條　即決例第二條末項ニ據リ處分シタル件送達スヘキ手續ハ便宜取計ヒ其ノ費用及呼出狀等ニ關スル費用ノ如キハ被告人ニ負擔セシムヘキヤ

第四條　即決例第八條以下ノ處分ヲナシ留置中正式裁判ヲ請求シ留置期限ヲ經過スルモ呼出狀到達スル迄ハ留置スヘキヤ

第五條　留置ノ費用ハ何ノ支辨ニ屬スヘキヤ

第六條　官吏職務ヲ行フニ當リ發覺シタル違警罪（ハ收稅檢査員ノ證券印稅規則違犯者等ノ告發ハ違警罪裁判所檢察官若クハ警察署長又ハ其分署長等ニ告發スヘキモノナルヤ果シテ然リトセハ警察署長及分署長等ニ於テ受理シタル事件ハ直チニ即決スヘキヤ

内務省指令　明治十九年三月五日（司法卿連署）

第一條　客年司法省丙第九號達ノ通

第二條　客年司法省丙第十一號達ノ通訓令スヘシ

第三條　送達手續ノ費ハ伺ノ通費用ハ被告人ニ負擔セシムルノ限ニアラス

第四條　留置期限ヲ經過シタル時ハ直ニ釋放スヘシ

第五條　監獄費ヨリ支辨スヘシ

第六條　見込ノ通

○

第二百八十九　司法警察規則附錄　明治十九年九月二十九日　太政官達第百二十八號（使）府縣

本年一月第十四號ヲ以テ相達候司法警察規則附錄別紙之通相定候條此旨相達候事

司法警察規則ハ治罪法ニ依リ消ル

（別紙）

司法警察規則附錄

外國公使及ヒ公使館屬員ノ事

第一條　外國公使ハ我國憲ヲ以テ羈縻スヘカラサル通義ナレハ是ヲ擴充スル時ハ其家屬並ニ公使館屬員（書記官隨員公使ノ僕隷書記官ノ家族及ヒ書記官ノ僕隷等總テ公使館ノ名籍ニアル者ヲ云フ）及ヒ其家屋車馬迄モ同樣ナリト思量スヘシ

第二條　內國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ傭ハレ公使館ノ名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬隷ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサルヲ得サルカ或ハ呼出シテ糺問セサルヲ得サル時ハ外務省ヲ歷テ公使館ヘ報知シ其唯諾ヲ待チテ後引出スヘシ尤其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルヿニアラス

第三條　內國人各公使館及書記官ニ傭ハレ中ハ其公使又ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ屆出外務省ハ其屆書ヲ速ニ司法警察官吏ヘ送達シ置ヘシ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置ヘシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在ル處ヲ聞糺ス時公使館ニ傭ハレ中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ遂ケタル後其處分ヲ施スヘシ若其姓名簿記中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館ヘ同道シ右ノ如ク處置スヘシ

但シ重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條　外國公使館內ハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ルヘカラス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト見留タル者奔逃シテ門內ヘ匿入セシ等毫髮ノ間モ猶豫スヘカラサル時ハ其把門者ニ告ケ其館主ノ許可ヲ受ケテ後館內又ハ邸內ヲ探索スヘシ

第五條　右公使館書記官ノ住宅內ニ在ル內外屬員ハ勿論馬車家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合セ而シテ其處分ヲ爲スヘシ

外國公使屬員罪ヲ犯シ並犯罪ノ內國人公使館ニ住居スル時ノ事

第六條　外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火强姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行ヲ見及フカ或ハ現ニ見スト雖モ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシカタキ時ハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申スヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可ラス或ハ屬員ノ內國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼レヨリ引渡ヲ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申ヘシ

第七條　犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其罪科ノ知レタル內國人現ニ公使館內ニ傭ハレテ公使館ニ住居スル時ハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會ヲ乞館主ニ引渡シヲ要求シ其人ヲ受取リテ後之ヲ捕縛ス可シ若シ館主之ヲ拒ムトキハ其旨ヲ猶外務省ヘ報知シテ其處分ヲ定ム可シ

〔一〕司法警察ニ關スル細則ヲ設ントスルトキ檢事ニ協議セシム　明治十九年四月三十日司法省訓令第一號警視廳北海道廳府縣（東京府ヲ除ク）

爾後各地方ノ便宜ニ基キ司法警察ニ關スル細則ヲ設ケントスルトキハ其地始審裁判所檢事ト協議ノ上告達スヘシ

右訓令ス

第二百九十　陸軍省所管ノ軍人軍屬脫走之者捕縛遞送方

明治五年六月二十九日

布告第百九拾五號

陸軍省所管ノ軍人軍屬脫走之者各府縣ニ於テ見當リ候ハヽ致捕縛府縣送リヲ以テ其地方所管ノ鎭臺本營或ハ分營ヘ護送可致候此旨相達候事

第二百九十一　逃亡犯罪人引渡條例

明治二十年八月十日公布　勅令第四十二號

朕逃亡犯罪人引渡條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十年八月三日

內閣總理大臣伯爵伊藤博文
外務大臣伯爵井上馨

司法大臣伯爵山田顯義

勅令第四十二號

逃亡犯罪人引渡條例

第一條　本條例ニ於テ締約國ト稱スルハ既ニ帝國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シ若クハ今後締結スル外國ヲ謂フ

引渡犯罪ト稱スルハ外國ト締結シタル犯罪人引渡條約ニ掲クル犯罪ヲ謂フ

逃亡犯罪人ト稱スルハ締約國ノ管轄内ニ於テ犯シタル引渡犯罪ニ付告訴告發ヲ受ケ若クハ有罪ノ宣告ヲ受ケタル帝國臣民外ノ人ニシテ帝國ノ管轄内ニ逃避シタル者又ハ逃避シタルノ嫌疑若クハ逃避セントスルノ嫌疑アル者ヲ謂フ但左ノ場合ニ於テハ帝國臣民ヲ包含ス

一　帝國ト請求國トノ犯罪人引渡條約ニ交互其臣民ノ引渡ヲ爲スヘキ條欵アルトキ

二　犯罪人引渡條約ニ交互ノ任意ヲ以テ其臣民ノ引渡請求ニ應スルコトアルヘキ旨ノ條欵アリ且請求國ニ於テ同樣ノ場合ニハ自國ノ臣民ヲ引渡スヘキ旨ヲ申出テタルトキ

第二條　締約國ヨリ逃亡犯罪人ノ引渡請求アリ之カ引渡ノ目的ヲ以テ其手續ヲ爲ストキハ本條例ニ定ムル所ノ條欵ニ據ルヘキモノトス

第三條　左ノ場合ニ於テハ逃亡犯罪人ヲ引渡スコトヲ得ス

一　引渡ノ請求ニ係ル者ノ所犯政事上ノ犯罪ナルトキ

二　引渡ノ請求ハ實際政事上ノ犯罪ニ付審問シ若クハ處刑セントスルノ目的ニ出テタル旨ヲ本人ニ於テ證明シタルトキ

第四條　逃亡犯罪人其引渡請求ニ係ル犯罪外ノ事件ニ付帝國内ニ於テ告訴告發ヲ受ケ又ハ處刑中ナルトキハ無罪又ハ刑期滿限若クハ其他ノ事由ニ因リ釋放セラレタル後ニアラサレハ之ヲ引渡スコトヲ得ス

第五條　帝國ト外國ト犯罪人引渡條約ヲ締結シタルトキハ逃亡犯罪人ノ犯事其締約以前ニ係ルト雖モ該締約國ノ請求ニ應シ其引渡ヲ爲スコトアルヘシ

第六條　引渡犯罪ニ付帝國裁判所ニ於テ締約國裁判所ト均シク裁判權ヲ有スト雖モ若シ司法大臣ノ意見ニ於テ其審判ヲ便ナラシメンカ爲メ逃亡犯罪人ノ引渡ヲ可トスルトキハ之ヲ引渡スコトアルヘシ

第七條　本條例ニ據リ發シタル總テノ逮捕狀ハ帝國内何レノ地ニ於テモ効力アルモノトス

第八條　一逃亡犯罪人ヲ二國以上ノ締約國ヨリ各其國ニ於テ犯シタル罪ノ爲メ引渡請求ヲ爲シタルトキハ最初請求ヲ爲シタル國ニ之ヲ引渡スヘシ但其請求ヲ爲シタル締約國間ニ特別ノ約束若クハ協議アル場合ハ此限ニ在ラス

第九條　司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一名若クハ二名以上ノ上席檢事ニ命シ逃亡犯罪人ヲ假ニ逮捕スル爲メ附錄第一號書式ニ依リ假逮捕狀ヲ發セシムルコトヲ得

外務大臣ハ締約國ヨリ相當ノ順序ヲ經由シ書面又ハ電信ヲ以テ逃亡犯罪人ヲ逮捕スル爲

メ既ニ逮捕狀ヲ發シタルコトノ通知ト其引渡ハ正式ニ依リ請求スヘキ旨ノ保證トニ接シタル後ニ限リ本條ノ請求ヲ爲スヘシ

第十條　假逮捕狀ニ據リ逃亡犯罪人ヲ逮捕シタル場合ニ於テ二月ヲ過キサル相當ノ期限內ニ其引渡ノ請求ナキトキハ之ヲ釋放スヘシ但此場合ニ於テ逮捕シタル者ヲ釋放スルモ再ヒ之ヲ逮捕シ及引渡スコトヲ妨ケサルモノトス

假逮捕狀ニ據リ逮捕シタル者ノ引渡請求アリタルトキハ更ニ附錄第二號書式ノ逮捕狀ヲ發シ假逮捕狀ト交換スヘシ

第十一條　第九條ニ定メタル例外ノ場合ヲ除クノ外ハ引渡請求ヲ爲シタル國トノ條約ニ定メタル相當ノ順序ヲ經由シ左ノ書類ヲ添ヘ引渡ノ請求アリタル後ニアラサレハ何人ヲモ引渡ノ目的ヲ以テ逮捕スルコトヲ得ス

一　告訴告發ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其所犯ニ付訴アリタル國ノ相當官吏ニ於テ發シタリト認メ得ヘキ逮捕狀ノ公寫及該逮捕狀ヲ發スルノ根據ト爲リタル口供書若クハ陳述書ノ公寫

二　有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ其宣告ヲ爲シタル裁判所ノ證印アル宣告書ノ寫

第十二條　外務大臣引渡請求書ニ接シ犯罪人引渡條約ノ條欵ニ適合シタリト思量スルトキハ該請求書ニ其關係書類ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ送付スヘシ

司法大臣本條ノ請求ニ接シ妥當ノ事由アル請求ト思量スルトキハ逃亡犯罪人ノ所在又ハ其到着スヘシト認ムル地ノ上席檢事ニ命シ逮捕狀ヲ發セシムヘシ

第十三條　上席檢事前條ニ揭ケタル司法大臣ノ命令ニ接シタルトキハ附錄第二號書式ニ依リ逮捕狀ヲ發スヘシ

第十四條　請求ニ係ル逃亡犯罪人ヲ逮捕シ若クハ假逮捕シタルトキハ其逮捕狀ヲ發シタル上席檢事又ハ之ヲ逮捕シタル地ノ上席檢事ニ引渡スヘシ

上席檢事ハ逃亡犯罪人逮捕ノ顚末ヲ直ニ司法大臣ニ具申スヘシ

司法大臣上席檢事ノ具申ニ接シタルトキ引渡請求書アレハ其寫及附屬書類ヲ速ニ該檢事ニ送付スヘシ但被告人ヲ釋放スヘキノ命令ヲ發スルトキハ此手續ヲ爲スニ及ハス

第十五條　告訴告發ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席檢事ハ速ニ之ヲ訊問シ其人違ナキコト及引渡請求書ニ附屬セル書類ノ確實公正ナルコトヲ認定スヘシ但上席檢事該書類ノミニテハ證據不充分ナリト認ムルトキハ仍ホ被告人ノ犯罪ニ對スル證據ヲ取ルコトヲ得

有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ上席檢事ハ速ニ之ヲ訊問シ其人違ナキコト及其引渡ヲ請求シタル締約國ノ相當裁判所ニ於テ宣告ヲ爲シタルノ確實ナルコトヲ認定スヘシ

第十六條　上席檢事被告人ノ訊問ヲ結了シタルトキハ訊問書ニ其處分方ニ關スル意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ具申スヘシ但上席檢事ハ之ト共ニ引渡請求書寫及附屬書類ヲ返却ス

ヘシ

司法大臣該檢事ノ具申ニ接シタルトキハ附錄第三號書式ニ依リ引渡狀ヲ發スルカ又ハ逮捕シタル者ヲ釋放スヘシ

第十七條　逃亡犯罪人ハ逮捕狀ニ據リ逮捕セラレタル後二月以上留置セラルヽコトナカルヘシ

第十八條　司法大臣ハ左ノ場合ニ限リ引渡狀ヲ發スルコトヲ得

一　引渡犯罪ニ付告訴告發ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ若シ其告訴告發ヲ受ケタル罪ヲ帝國內ニ於テ犯シタルモノトセハ帝國ノ法律ニ據リ被告人ヲ審判ニ付スルニ充分ナル犯罪ノ證據アリト認メタルトキ

二　有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ場合ニ於テハ相當裁判所ニ於テ其宣告ヲ爲シタルコトヲ認メタルトキ

第十九條　闕席裁判ニ由リ有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ハ其引渡ヲ請求シタル締約國トノ間ニ特別ノ約款アルニ非サレハ本條例ニ於テハ之ヲ告訴告發ヲ受ケタル者ト爲シ有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ト認メス

第二十條　逮捕シタル者ヲ釋放シ又ハ其引渡ノ爲メ引渡狀ヲ發シタルトキハ司法大臣ハ引渡請求書及附屬書類ニ其執行シタル手續及其理由ノ略記ヲ添ヘ之ヲ外務大臣ニ返付スヘシ

第二十一條　引渡狀ヲ發シタル後何人ヲモ一月以上留置スルコトヲ得ス但此期限內ニ之ヲ帝國外ニ引取ラサルトキハ請求國相當官吏ニ於テ正當ノ事由ヲ示スニアラサレハ釋放スヘシ

第二十二條　逃亡犯罪人ヲ引渡ストキハ其逮捕ノ際差押ヘタル本人ノ携帶品ハ正當ノ理由アルニアラサレハ其引渡ノ節本人ト共ニ悉ク之ヲ交付スヘシ

第二十三條　司法大臣ハ外務大臣ノ請求ニ依リ一外國ヨリ他ノ外國ニ引渡シタル者ノ帝國內海陸ノ通行ヲ認可スルコトヲ得

本條ノ請求ハ引渡ヲ受クヘキ國ノ政府ヨリ引渡狀ノ公寫ヲ添ヘ相當ノ順序ヲ經由シタル照會書ヲ外務大臣ニ於テ受領シタルトキニ限ル但帝國ト請求國トノ間ニ特別ノ約款ナキトキハ該照會書ノ外仍ホ請求國ノ政府ニ於テ之ト同一ノ場合即チ第三國ヨリ帝國ニ逃亡犯罪人ヲ引渡シタル場合ニ該請求國內海陸ノ通行ヲ均シク認可スヘキノ保證ヲ爲シタルトキニ限ル

附錄

第　號

假逮捕狀

逮捕セラルヘキ者ノ氏名
年齡本貫住所

司法大臣ノ命令ヲ受ケ逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此假逮捕狀ヲ發シ右ニ揭タルヽヽヽヽニ

逮捕ヲ受タル者ノ署名若シ之ヲ得ル能ハサルトキハ其理由ヲ記スヘシ

執行ノ
年月日時

一號書式

於テ、、、、ノ犯罪ニ付（告訴 告發 有罪ノ宣告）ヲ受タル、、、國ノ逃亡犯罪人、、、、ヲ法律ニ遵ヒ處分スル爲メ逮捕スヘキコトヲ命スルモノ也

検事局
明治　年　月　日
ノ　印

上席検事署名捺印

裁判所書記署名捺印

執行ノ場所

執行ノ手續

家宅ヲ捜索シタルトキハ其事實ヲ記スヘシ

右ノ通執行候也

明治　年　月　日

巡査又ハ憲兵署名捺印

割印

（此狀ヲ送達シ一葉ヲ受取人ニ渡ス（シ））

（英譯文ヲ此狀ノ裏面ニ記スヘシ）

假逮捕狀

逮捕セラルヘキ者ノ氏名
年齢本貫住所

司法大臣ノ命令ヲ受ケ逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此假逮捕狀ヲ發シ右ニ掲タル、、、、、ニ於テ、、、、ノ犯罪ニ付（告訴 告發 有罪ノ宣告）ヲ受タル、、、國ノ逃亡犯罪人、、、、ヲ法律ニ遵ヒ處分スル爲メ逮捕スヘキコトヲ命スルモノ也

検事局
明治　年　月　日
ノ　印

上席検事署名捺印

裁判所書記署名捺印

執行ノ場所

執行ノ手續

家宅ヲ捜索シタルトキハ其事實ヲ記スヘシ

右ノ通執行候也

明治　年　月　日

巡査又ハ憲兵署名捺印

逮捕ヲ受タル者ノ署名若シ之ヲ得ルヲ能ハサルトキハ其理由ヲ記スヘシ

執行ノ年月日時

第二

逮捕狀

逮捕セラルヘキ者ノ氏名
年齢本貫住所

司法大臣ノ命令ヲ受ケ逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此逮捕狀ヲ發シ右ニ掲タル、、、、、ニ於テ、、、、ノ犯罪ニ付（告訴 告發 有罪ノ宣告）ヲ受タル、、、

逮捕ヲ受タル者ノ署名若シ之ヲ得ルヲ能ハサルトキハ其理由ヲ記スヘシ

執行ノ年月日時

執行ノ場所

號書式

、國ノ逃亡犯罪人、、、、ヲ法律ニ遵ヒ處分スル爲メ逮捕スヘキコトヲ命スルモノ也

檢事局	上席檢事署名捺印
明治年月日	裁判所書記署名捺印
ノ印	

割印

（此狀ヲ送達シ一葉ヲ受取人ニ渡スヘシ）

（英譯文ヲ此狀ノ裏面ニ記スヘシ）

逮捕狀

逮捕セラルヘキ者ノ氏名
年齡本貫住所

司法大臣ノ命令ヲ受ケ逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此逮捕狀ヲ發シ右ニ揭タル、、、、ニ於テ、、、ノ犯罪ニ付（告訴 告發 有罪ノ宣告）ヲ受タル、、

執行ノ手續	右ノ通執行候也 明治年月日 巡査又ハ憲兵署名捺印
家宅ヲ搜索シタルトキハ其事實ヲ記スヘシ	
逮捕ヲ受タル者ノ署名若シ之ヲ得ル能ハサルトキハ其理由ヲ記スヘシ	
執行ノ年月日時	
執行ノ場所	

、國ノ逃亡犯罪人、、、、ヲ法律ニ遵ヒ處分スル爲メ逮捕スヘキコトヲ命スルモノ也

檢事局	上席檢事署名捺印
明治年月日	裁判所書記署名捺印
ノ印	

第三號

引渡狀

引渡サルヘキ者ノ氏名
年齡本貫住所

逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此引渡狀ヲ發シ明治、、年、、月、、日附ノ（逮捕狀 假逮捕狀）ニ據リ、、國ニ於テ、、、ノ犯罪ニ付（告訴 告發 有罪ノ宣告）ヲ受タル逃亡犯罪人トシテ明治、、年、、月、、日逮捕シタル右、、、ヲ受取コトヲ相當ニ命セラレタル、、、ニ之ヲ引渡スヘキコトヲ命ス因テ

執行ノ年月日時	執行シタル場所	受取人ノ

右ノ通執行候也
明治年月日
巡査又ハ憲兵署名捺印

書式

該受取人丶丶ニ於テ右丶丶ヲ監禁シ丶丶國ノ管轄内ニ送致シ相當官吏ニ交付スルコトヲ命スルモノ也

明治　年　月　日　司法大臣丶丶丶丶　印

署名	
右ノ通執行候也 明治　年　月　日　引渡サルヘキ者ヲ留置シタル監獄ノ典獄ノ署名捺印	

割印

（此狀ヲ送達シ一葉ヲ受取人ニ渡スヘシ）

（英譯文ヲ此狀ノ裏面ニ記スヘシ）

引渡狀

引渡サルヘキ者ノ氏名年齢本貫住所

逃亡犯罪人引渡條例ニ據リ此引渡狀ヲ發シ明治丶丶年丶丶月丶丶日附ノ（逮捕狀／假逮捕狀）ニ據リ丶國ニ於テ丶丶ノ犯罪ニ付（告訴／告發／有罪ノ宣告）ヲ受タル逃亡犯罪人トシテ明治丶丶年丶丶月丶丶日逮捕シタル右丶丶ヲ受取コトヲ相當ニ命セラレタル丶丶ニ之ヲ引渡スヘキコトヲ命ス因テ

執行ノ年月日時	執行シタル場所	受取人ノ

該受取人丶丶ニ於テ右丶丶ヲ監禁シ丶丶國ノ管轄内ニ送致シ相當官吏ニ交付スルコトヲ命スルモノ也

明治　年　月　日　司法大臣丶丶丶丶　印

署名	
右ノ通執行候也 明治　年　月　日　引渡サルヘキ者ヲ留置シタル監獄ノ典獄ノ署名捺印	

○第二十類

○第一章　宮城　内務報告例

第二百九十二　江戸ヲ東京ト改稱シ都ヲ遷スノ詔勅　明治元年七月二十七日　布告

詔書

朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻湊ノ地宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ノ海内一家東西同視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨ

戊辰七月廿七日

慶長年間幕府ヲ江戸ニ開キシヨリ府下日ニ繁榮ニ赴候ハ全ク天下之勢斯ニ歸シ貨財隨テ聚リ候事ニ候然ルニ今度幕府ヲ被廢候ニ付テハ府下億萬之人口頓ニ活計ニ苦候者モ可有之哉ト不便ニ被思食候處近來世界各國通信之時態ニ相成候テハ專ラ全國之力ヲ平均シ皇國御保護之御目途ヲ不被爲立候テハ不相叶御事ニ付屢東西御巡幸萬民之疾苦ヲモ被爲問度深キ叡慮ヲ以御詔文ノ旨被仰出候孰レモ篤ト御趣意ヲ奉戴シ徒ニ奢靡ノ風習ニ慣レ再ヒ前日之繁榮ニ立戻候ヲ希望シテ一家一身之覺悟不致候テハ遂ニ活計ヲモ失ヒ候事ニ付向後銘々相當之職業ヲ營ミ諸品精巧物産盛ニ成リ行自然永久ノ繁榮ヲ不失樣格段之心懸可爲肝要事

〔一〕江戸城ヲ以テ東京城ト稱ス　明治元年十月十三日
御東臨之節ハ當城ヲ以テ皇居ト被定候ニ付以來東京城ト可稱事
布告

〔二〕皇居ヲ宮城ト稱ス　明治二十一年十月二十七日
宮内省告示第六號
皇居御造營落成ニ付自今宮城ト稱セラル

〔三〕參内賢所參拜吹上御苑參入ノ輩昇降下乘制限　明治二十二年一月九日
宮内省號外達

參内及
賢所參拜吹上御苑參入ノ輩昇降下乘制限左ノ如ク相定メ本年本月十一日ヨリ實施ス
但時ニ臨ミ特ニ示達スル場合ニ於テハ此限ニアラス

參内
一親任官勅任官爵香間祗候有爵者非役從四位以上外國公使其他内外國人ノ勲三等以上若クハ勅任ノ待遇ヲ受クルノ輩新年朝拜三大節及外國公使國書ヲ捧呈スル場合ニ限リ正門ヲ入リ御車寄ヨリ昇降シ乘馬車乘馬ノ儘昇降所ニ至ルヲ得若シ其人力車ナルトキハ正門ヨリスルモノハ正門外ニ於テ阪下門又ハ通用門ヨリスルモノハ東車寄前ニ於テ下乘スヘシ
一同上ノ輩同上ノ場合ヲ除クノ外ハ都テ阪下門又ハ通用門ヲ入リ東車寄ヨリ昇降シ乘車馬ノ儘昇降所ニ至ルモノトス
一奏任官華族非役正五位以下從五位以上内外國人ノ勲四等以下勲六等以上若クハ奏任ノ待遇ヲ受クルノ輩門跡寺院ノ住職ハ新年朝拜以下都テノ場合ニ於テ阪下門又ハ通用門ヲ入リ東車寄ヨリ昇降シ乘車馬ノ儘昇降所ニ至ルモノトス

賢所

一親任官以下奏任ノ待遇ヲ受クル輩及門跡寺院ノ住職ハ正門又ハ阪下門通用門吹上門ヲ入リ其正門吹上門ヨリスルモノハ千里門外ニ於テ阪下門通用門ヨリスルモノハ外庭東門ヲ經テ道灌門外ニ於テ下乘スルモノトス但正門ヨリスルモノハ乘馬車乘馬ノモノニ限ル

吹上御苑
一親任官以下勅任ノ待遇ヲ受クル輩ハ吹上門ヲ入リ廣芝口ニ於テ下乘スルモノトス
一奏任官以下奏任ノ待遇ヲ受クル輩ハ吹上門ヲ入リ吹上一ノ門ニ於テ下乘スルモノトス

〔四〕判任官及判任待遇ノ輩賢所參拜ノ節諸門下乘制限　明治二十二年二月七日
宮内省號外達
判任官及判任待遇ノ輩
賢所參拜ノ節ハ左ノ諸門外ニ於テ下乘スヘシ
正門
阪下門
吹上門
通用門

○

●内務報告例沿革要領

明治十九年九月内務省令第十六號ヲ以テ報告ニ係ル諸達類ヲ廢ス○同月同省令第十七號ヲ以テ内務報告例ヲ定ム○二十一年十月同省令第八號ヲ以テ前令ヲ廢止ス○同月同省訓令第二十號ヲ以テ更ニ内務報告例ヲ定ム

第二百九十三　從前内務省諸達中報告ニ係ル二十件ヲ廢ス　明治十九年九月二十日
内務省令第十六號廳府縣集治監假留監

明治八年九月當省乙第百十五號達府縣官員異動屆○九年三月同乙第二十八號達十年七月同乙第六十一號達十七年四月同乙第二十二號達一般人民警察上賞與施行表及ヒ警察吏員吊祭扶助療治料施行表及ヒ一般人民吊祭扶助療治料施行表○九年十二月同乙第百三十六號達但書官沒品返扱方ノ件○十年三月同乙第三十四號達中人民所藏ノ軍用銃砲彈藥獻納處分濟屆○十一年三月同乙第三十一號達警察署明細書○十二年一月內藏乙第六號達勸業委托金出納當省ヘ報告ノ分○十二年六月當省乙第三十一號達末項○十五年十一月同乙第五十九號達但書神官住職任免死亡○十三年四月同乙第十六號達祠官祠掌犯罪○十三年十一月內藏第卅八號達第十一條備荒儲蓄三箇月報當省ヘ報告ノ分○十三年十一月當省乙第四十六號達巡査懲罰金賣淫罰金巡査還納被服類及警察本分署不用品賣却代處分方○十五年三月同乙第十七號達賣淫罰金支拂屆出ノ內末項尤以下二十一字○十五年十一月同乙第六十四號達神社附屬ノ講社結集○十五年十一月同坤申第三六二號達地方稅經濟ニ屬スル土地調及地方稅經濟中府縣廳官舍其他建物調及官舍倉庫將來使用ノ見込アル分人民ヘ貸渡顚末○十六年三月同乙第卅三號達在監人中傳染病患者一周申報○十六年四月同乙第十三號達遺失物公賣金前年度分○十六年五月同乙第廿號達傳染病患者申報○十七年三月同訓示看守押丁賞與屆○十七年五月同乙第二十六號達但書賭博犯過料金納付濟○十八年五月同甲第十五號達警察費及警察廳舍建築修繕費原案額○十九年二月同甲第四號及乙第一號達徒流刑禁獄及懲役終身等ノ四徒變死以上二十件

右廢止ス

〔一〕內務報告例ヲ定ム 明治二十一年十月九日內務省訓令第二十號廳府縣憲兵本部集治監假留監

內務報告例別冊ノ通相定ム

但別冊ハ別ニ頒ツ

（別冊）

內務報告例

汎則

第一條 報告例ハ警視廳北海道廳府縣廳及憲兵本部集治監假留監ニ於テ法律命令ヲ執行シ或ハ各長官權內ノ事務ヲ處分シタル事項ニ就キ緩急輕重ニ從ヒ內務ニ屬スル事項ヲ報告ス可キ順序ヲ示ス者ナリ

但凡ソ各廳ノ經費豫算決算等ニ關スル諸報告並氣象報告ハ別ニ定メタル規則ニ依準ス可シ

第二條 從前ノ令達中內訓ハ之ヲ除ク本例ニ掲載セサル者ハ總テ報告ニ及ハス

但本例目ニ掲載セサル事項ニシテ事務上當然ノ報告ヲ要スル即チ諸屆類ハ本例ニ依準ス可キ者トス

第三條 報告ヲ分テ日報週報月報半年報年報ノ五種トス

第四條 日報ハ翌日週報ハ每週月報ハ每月半年報ハ每半年年報ハ一年ニ各一回報告スル者トス

但會計年度ニ關スル者ハ會計年度ニ依ル可シ

第五條　報告ハ直接使命ノ外總テ郵便ニ付ス可シ

但例目日報中第十第十一第二十三第二十四ニシテ事重大ナル者ハ即時電信ニテ報告ス可シ

第六條　報告期限ハ從前成規アル者ト否ラサルトヲ問ハス總テ本例ニ於テ指定シタル時日マテニ發送ス可シ

第七條　報告ノ書類ハ他ノ文書ト混同セサルカ爲メ別紙雛形ノ通リ一切墨線ノ罫紙ヲ用井五種ニ通用ス可シ

但表式ハ白紙ヲ用フルモ妨ナシ

第八條　警察令及廳府縣令告示其他印刷シタル者ハ更ニ料紙ニ謄寫スルニ及ハスト雖モ料紙大ノ無罫美濃紙一葉ニ滿タサル者ハ半ナシニ印刷又ハ貼付シテ進達ス可シ

第九條　各報告ノ記載方ハ一事件又ハ一表毎ニ紙頁ヲ改メ警察令及廳府縣令告示ト雖モ連綴ス可カラス紙末適宜ノ所ニ於テ年月日宛名ヲ記シ長官署名調印ス可シ

但例目中ニ附スル十干ノ種類同一ナル者例ヘハ日報中ノ府縣處務細則ト議長改選トノ類ヲ二件以上ヲ同時ニ報告スルトキニ限リ經メテ一括トシ紙頁ハ之ヲ改ム目錄ヲ付シ其年月日宛名長官ノ署名調印ハ目錄紙ノ末ニ於テス可シ然ルトキハ一事件又ハ一表毎ニ之ヲ爲スニ及ハス

第十條　凡ソ報告書ハ紙數ノ多カラサルヲ要ス例ヘハ豫算議案決算報告ノ如キ冊子ヲナシタル者ト雖モ別ニ上申スル事項ナキトキハ其冊子ノ末ニ年月日其他ヲ記入シテ報告ス可シ

第十一條　諸表ノ樣式ハ其事柄ニ依リ大小廣狹ノ差違アルハ勿論ナレハ豫メ一定シ難シト雖モ成ルヘク美濃紙一葉ニ調製スルヲ要ス其短縮シ得可キ者ハ半葉ニ調製スルモ妨ケナシ

但諸表諸圖面共編綴ノ爲メ四隅ニ餘白ヲ存ス可シ

第十二條　諸表樣式ニハ横線ノミヲ示ス者ト雖モ進達ノ表ニハ縱線ヲ加フ可シ又登記ス可キ事柄ナキ空欄アラハ縱線ヲ塡充シテ脫漏ニ非サルヲ證ス可シ

第十三條　諸表樣式ハ已ニ頒布ノ者ト雖モ執務者ノ便ヲ圖リ茲ニ彙集シテ本例ニ編入ス若シ今後命令訓令ニ依リ改正ヲ來ス可キ事アルトキハ延テ本例ニ及フ者トス

第十四條　今後新タニ發スル所ノ命令訓令中ニ於テ期限ヲ定メ報告ヲ要スル旨ヲ記載シタルトキハ其報告ノ種類ニ依リ此例目中ニ追加シタル者ト看做ス可シ

第十五條　數位ヲ以テ記入スル事實ニシテ前年ト比較シ著シキ增減アル者ハ其事由ヲ表尾ヘ付記ス可シ

第十六條　數位ハ金員ハ厘位ニ量數ハ合位ニ坪數ハ才位ニ段別ハ歩位等ニ止メ一位ニ●ヲ付シ傍ヘ圓石坪等ノ文字ヲ記載ス可シ

但表尾ニ特ニ數位ヲ示セル者ハ此限ニアラス

日報

第一 本省主管ニ屬スル警察令及廳府縣令告示 十三年四月第十五號布告府縣會規則第十一條

第二 府縣處務細則 二十一年一月訓令第四五號

第三 府縣會議長副議長改選 同上

第四 新聞紙雜誌ノ禁止停止又ハ解停達濟 同上

第五 新聞紙雜誌ノ發行差止及之ヲ要セサルニ至リタル事 同上

第六 新聞紙雜誌ノ發賣頒布ヲ禁シ又ハ差押タル部數 同上

第七 新聞紙條例違犯者告發及裁判確定 十九年八月訓令第五九八號

第八 十人以上共犯シテ重罪ヲ犯セシト認ムル者捕獲 十七年四月四日内達

第九 職務上傳染病感染又ハ死亡者手當金給與 同上

第十 囚徒反獄 二十年三月訓令第十九號

第十一 囚徒越獄及逃走 同上

第十二 國幣社例祭異動 同上

第十三 官國幣社風火災及盜難 同上

第十四 官國幣社宮司死去 同上

第十五 傳染病流行ノ徵候 十九年五月省令第四號

第十六 避病院ノ開設 十九年三月省令第一號

第十七 檢疫委員ノ設置 同上

第十八 警視總監府縣知事忌引

第十九 警視總監府縣知事代理 九年四月第三十四號太政官達

第二十 府縣東京府ヲ除ク高等官歸省養痾聞屆

第二十一 府縣非職高等官住所

第二十二 官吏懲戒處分

第二十三 天變地異ニ依リ人畜ノ死傷家屋田園ノ破壞流失其他ノ異常 十八年九月内藏甲第二十六號達十八年九月内藏甲第二十八號達

第二十四 百戸以上ノ火災並重要ノ關係アル家屋ノ火災 十五年十一月太政官第六十號達十八年九月内藏甲第二十八號達

第二十五 警視廳及府縣會計主務官ノ印影

週報

第一 府縣會開設中景況 十八年九月内藏甲第二十八號達

第二 臨時府縣會及常置委員會決議諸件

第三 受恩給者受領地轉換處分

第四 受恩給者權利消絶

第五 受恩給者氏名變換及轉籍

第丙六	警察費警察廳舍建築修繕費豫算決議額	十五年十月乙第五十六號達		
第七	火藥類賣買營業免許並火藥庫設置許可	十八年一月第一號公達		
第八	銃砲賣買營業免許	五年正月第二十八號布告		
第九	獵銃製造許可並軍用銃修復營業許可濟			
第十	四人ノ特赦			
第十一	假出獄停止			
第十二	囚徒外役ノ爲メ設置セシ假監引上	十四年十月第八十一號公達監獄則第二十五條 十八年九月司法省丙第七號達		
第十三	監獄建築工事落成			
第戊十四	國庫ノ補助ニ係ル河川港灣工事竣功		第一表	
第十五	國(縣)道新設變更工事竣功		第二表	
第己十六	公立病院設立			
	月報			發送期日
第丙一	集會條例處分			翌月十日
第二	在監月末現在人員		第三表	十九年五月省令第七號 同 上
第己三	廳府縣ヨリ徒流刑禁獄及懲役終身囚徒收監濟	十七年八月十五日假置監ヘ達 同 上		
第四	傳染病患者	十九年五月省令第四號	第四表	翌月末日
第五	在監傳染病患者		第五表	同 上 同 上

	半年報			
第丁一	社寺明細帳ノ異動		第六表	十二年六月乙第三十一號達 八月末日
第壬二	在監人死亡		第七表	十九年五月省令第七號 同 上
	年報			
第甲一	地方事務並ニ管內ノ景況	十三年第十六號布告十五年十二月乙第七十二號達二十年十一月省令第三號		二月二十日 同 上
第二	通常府縣會決議諸件			同 上
第三	地方稅一周年度出納決算	十三年十一月內務乙第三十八號達二十年十二月大藏省令第十五號		七月三十一日
第四	備荒儲蓄金總出納精算			翌年度末
第五	區町村費收支取調	十八年九月甲第二十九號達		二十年十月訓令第四十四號 一月三十一日
第六	府縣管理ニ係ル公園飲用水道及公葬墓地收支豫算			同 上 九月三十日
第乙七	府縣管理ニ係ル公園飲用水道及公葬墓地收支精算		第八表	十九年五月省令第三號 三月二十日
第八	戶口表		第九表	同 上 同 上
第九	人口出入表		第十表	同 上 同 上
第十	本籍人族別表		第十一表	同 上 同 上
第十一	本籍生年別人口表		第十二表	同 上 同 上
第十二	本籍出產死亡婚姻表			

第十三　市街現住人出產死亡表　第十三表　同上　同上
第十四　就除籍送入籍及失踪表　第十四表　同上　同上
第十五　某監獄署在監有籍者ノ府縣別及無籍者ノ年齡　第十五表　十九年五月省令第七號　同上
第十六　耕作及捕魚採藻業戶數表　第十六表　十九年五月省令第三號　每六年目三月二十日
第十七　賞與施行表　第十七表　十八年十二月內農甲第三十八號達　二月二十日
第十八　警察巡閱官巡閱ノ概況　集治監假留監判任以下使用ノ狀況臨時使用シタル雇員ノ日數及金額　二十年六月訓令第三十六號　巡閱後三十日以內
第十九　新聞紙(雜誌)配布數　第十八表　十九年十二月勅令第七十七號閣令第三十三號　四月一日
第二十　火藥營業者ノ賣買シタル種類數量　十六年五月十日訓示　二月二十日
第二十一　銃砲類外國人ト賣買員數　十八年一月第一號公達　一月三十一日
第二十二　神佛教務所說教所處分　二十年四月訓令第二十六號　同上
第二十三　社寺廢合跡建物處分　十七年十月乙第三十八號達　三月三十一日
第二十四　社寺所傳什物祠堂金並由緒アル地所建物處分　十八年五月甲第十六號達　同上
第二十五　社寺官有地境內木竹伐採處分　同上　同上
第二十六　社寺寶物古文書ノ異動　同上　同上
第二十七　官祭招魂社及官修墳墓異動　同上　同上
第二十八　官國幣社從前官營建物修繕並社營建物改造修繕處分　同上　同上
第二十九　十八年五月甲第十六號達　同上

第三十　官國幣社保存金受拂精算　第十九表　二十年三月訓令第十九號　五月三十一日
第三十一　官國幣社社入金受拂精算　第二十表　同上　同上
第三十二　官國幣社諸蓄積金異動　第二十一表　同上　同上
第三十三　古社寺保存資金年末計算　第二十二表　二月二十日
第三十四　國(縣)道道幅取擴工事竣功　第二十三表　十九年三月省令第一號　三月三十一日
第三十五　土木工費總計表　第二十四表　十九年二月甲第二號達　九月二十日
第三十六　水害表　第二十五表　十五年九月乙第四十九號達　三月三十一日
第三十七　廳府縣官及郡區町村吏　第二十六表　一月三十一日
第三十八　濟貧恤窮施行表　第二十七表　十五年十一月乙第六十二號達　二月二十日
第三十九　棄兒並養育費　第二十八表　十六年五月乙第二十三號達　同上
第四十　警察區畫及配置官吏　第二十九表　十九年五月省令第七號　同上
第四十一　救護及盜難　第三十表　同上　同上
第四十二　就捕犯罪人及違警罪犯諸犯則人員　第三十一表　十九年五月省令第七號　二月二十日
第四十三　賭博犯ノ懲罰及過料　第三十二表　同上　同上
第四十四　監視人員　第三十三表　同上　同上
第四十五　火災　第三十四表　同上　同上
第四十六　變死及棄兒　第三十五表　同上　同上

第四十七	警察上ニ死傷セシ人員	第三十六表	同上	同上
第四十八	警察上ノ褒賞及恩給給助	第三十七表	同上	同上
第四十九	監獄吏及雇人員	第三十八表	同上	同上
第五十	未決者ノ出入人員	第三十九表	同上	同上
第五十一	已決囚ノ出入人員	第四十表	同上	同上
第五十二	新ニ刑ヲ受ケシ已決囚ノ罪名及刑名別 已決囚出監時還善ノ狀況及年齢等ノ關係	第四十一表		同上
第五十三		第四十二表	十九年五月省令第七號	同上
第五十四	在監人ノ作業	第四十三表	同上	同上
第五十五	懲治者ノ出入人員	第四十四表	同上	同上
第五十六	新入懲治者ノ入場度數及年齢等ノ關係	第四十五表	同上	同上
第五十七	懲治者出場時還善ノ狀況及工技學藝ノ進否	第四十六表	同上	同上
第五十八	別房留置者及携帶乳兒ノ出入人員	第四十七表	同上	同上
第五十九	在監人工錢ノ收入及給與	第四十八表	同上	五月二十日
第六十	府縣會議員選擧被選擧權ヲ有スル者	第四十九表	十四年十二月乙第六十號達	四月二十日
第六十一	神職祠官祠掌	第五十表		同上
第六十二	種痘明細表	第五十一表	十九年三月省令第二號	四月三十日
第六十三	醫事娼妓黴毒檢査及中毒表	第五十二表	同上及十一年十二月乙第八十八號達	同上

第六十四	死亡者年齢區別表	第五十三表	十八年十月甲第三十三號達	同上
第六十五	官沒地	第五十四表	十七年二月乙第十號達	三月三十一日
第六十六	土地增減	第五十五表	十九年三月省令第一號十七年三月第七號布告十二年六月乙第二十九號達十三年三月乙第十號達八號達十七年二月乙第十號達	同上
第六十七	普通官有地貸渡	第五十六表	十九年三月省令第一號十七年二月乙第十號達	同上
第六十八	地種目變換	第五十七表	十九年三月省令第一號十二年六月乙第二十九號達十七年二月乙第十號達	同上
第六十九	普通官有地ノ土石動植物拂下	第五十八表	八年乙第六十五號達十九年省令第一號	同上
第七十	普通官有地外國人ヘ貸渡料收入未收入	第五十九表	十四年二月乙第十一號達十九年八月農商務省訓令第十三號	出納閉鎖後一月以內

汎則第七條ニ掲クル五種ニ通用スヘキ料紙ノ雛形

何

報

廳名

右及報告候也

明治　年　月　日

長官官氏　名印

内務大臣宛

諸表式及印刷物ニ付テノ書法モ右ニ準シ紙末適宜ノ所ニ記載スヘシ

報告例諸表様式

第一表

何年月日許可　國庫ノ補助ニ係ル某川筋（又ハ某運河）自何郡村至何郡村長何里間
何年月日竣功　（又ハ某港）改修（又ハ新築變更）工事竣功

廳名

工事種類	箇所	摘要
浚渫	長又ハ坪	
制水	……	

週

報

何々	合計

一長又ハ坪ノ欄ヘハ築堤護岸突堤棧橋ノ類ハ延長ヲ間未滿ノ小數ハ分ヲ以テ記スヘシ 浚渫掘鑿ノ類ハ總立坪ヲ掲ク可シ但制水閘門ノ類ハ記載ヲ要セス

一摘要ノ欄ヘハ各項工事ノ種類ニ應シ其築法ノ大要工事ノ成績尺度等ヲ概記スヘシ

第二表

何年月日創業 何年月日竣功 國道第何號路線(縣道何街道)何郡村地内 (又ハ自何區町至何郡村)路線新設(變更)工事竣功

廳名

種目	延長	幅	摘要
道路			
並木敷			
濕拔敷			
保壁			
暗渠			
隧道			
鐵橋			

報

石橋	木橋	土橋	何々橋	合計

新道長	内譯 何町何村間 何驛間	舊道長	内譯 何町何村間 何驛何町間

一延長及幅ハ間數ヲ用ヰ間未滿ハ分トシ新道及舊道長ハ里法ヲ用ヰ間未滿ハ尺寸トス

一摘要ノ欄道路ハ平均勾配最險勾配ヲ大略平地ト山路ニ區分シテ記載スヘシ

一同並木敷及濕拔敷ハ各條數ヲ記載スヘシ

一同保壁ハ小土堤及柵欄干等其種目毎ノ延長ヲ記載スヘシ

一同隧道ハ箇所毎ノ構造及長高ヲ橋梁ハ箇所毎ノ長ヲ記載スヘシ但其相同キモノハ二箇所或ハ三箇所ト通シテ記スルモ妨ケナシ

一新道長ノ内譯ハ新タニ里程標ヲ設クルモノニ限ル

一幅ノ欄一種目ト雖モ幅員異ナルモノハ各區別シテ記入スヘシ

一橋梁並ニ之ニ附帶セシ道路ハ本表ニ準シ調製スヘシ

一道錢及橋錢ヲ請求スヘキ工事モ本表ニ準シ調製スヘシ

一實測平面圖及高低圖ヲ添付スヘシ

一本表ハ國庫費補助ノ有無ニ拘ハラス總テ國縣道新設變更工事竣功ノ報告ニ適用スヘシ

第三表

在監月末現在人員〔明治何年何月〕　廳名

刑名	男	女	合計
未決者 前月ヨリノ者			
未決者 本月入ノ者			
合計			
無期徒刑			
有期徒刑			
無期流刑			
有期流刑			
重懲役			
軽懲役			
重禁獄			
軽禁獄			
重禁錮			
軽禁錮			

月報

刑名	男	女	合計
賭博 懲罰 四年以上			
賭博 懲罰 四年未滿			
賭博 懲罰 一年以上			
賭博 懲罰 一月以上			
賭博 過料ヨリ換ヘシ			
賭博 前月ヨリノ者			
賭博 本月入ノ者			
賭博 合計			
懲治 不論罪			
懲治 情願			
懲治 前月ヨリノ者			
懲治 本月入ノ者			
懲治 合計			
滿期後在所ナキ者			

刑名	男	女	合計
主刑ノ罰金ヨリ換ヘシ			
附加刑ノ罰金ヨリ換ヘシ			
軽禁錮			
拘留			
科料ヨリ換ヘシ拘留			
懲役終身			
懲役十年以下			
閏刑禁獄終身			
閏刑禁獄十年以下			
舊刑 國事犯禁獄五年以上			
舊刑 國事犯禁獄五年未滿十日以上			
別房監視ニ附セラレ留置又ハ假出獄許可ノ者等ニシテ引取人ナク又ハ任ナキ者			
合計 前月ヨリノ者			
合計 本月入ノ者			
計			
産褥 乳兒 前月ヨリノ者			
産褥 乳兒 本月入ノ者			
監中出産			
合計			
總計			

一軍衙ノ處斷ニ係リシ囚徒及便宜警察署ニ於テ拘留又ハ換刑輕禁錮ヲ執行セシ已決囚徒ハ本表並已決ニ關スル諸表ヘ合記スヘシ但刑名ヲ掲ケタル諸表ニ當テハ賭博犯ノ次ヘ軍衙ノ處斷ニ係リシ囚徒ノ刑名ヲ掲ケ其數ヲ登記スヘシ

第四表

何病患者〔明治何年何月〕　廳名

國名	郡區名	發熱	流行經過	有病	患者	死亡
		日數	町村數	同上ノ戸數		

月報		
某國	某區 某郡	自何月何日 至何月何日
某國	某郡	
合計		

一六種ノ傳染病ニ就キ各一表ヲ製スヘシ

一戸數ハ前年末戸籍調査ニ據ルヘシ

一甲月ニ報告シタル有病町村數及戸數ハ乙月報告ニハ之ヲ省キ其月中ニ新タニ患者アリタル町村數及戸數ノミヲ掲ク丙月以下之ニ倣フ

一警察署留置場ニ拘禁中ノ者モ本表ヘ記入スヘシ

第五表

在監何病患者〔明治何年何月〕

月報	種類	一月間延人員	監房數			廠名
			感染患者	不感染患者	死亡	
某（監獄署）未決						
已決						
懲治						
別房留置						
合計						

報	
某（監獄署）未決	
已決	
懲治	
別房留置	
合計	

一六種傳染病ニ就キ各一表ヲ製スヘシ

一甲月ニ報告シタル感染監房數ハ乙月報告ニハ之ヲ省キ其新タニ患者アリタル監房ノミヲ掲ク丙月以下之ニ倣フ

一携帶乳兒ハ患者死亡ノ人員ノミ備考ニ記載スヘシ

第六明細帳異動報告種目

一神社（祠宇並境外遥拜所（建物アル者）招魂社祖靈社之ニ準ス但遥拜所以下ハ祭神ヲ除ク）

祭神

本殿拜殿附屬建物　但一坪以内ハ記載ニ及ハス以下建物何レモ同シ

境内地坪並地種

境内神社祭神並建物

境内遥拜所（建物アルモノ）招魂社祖靈社建物

一寺院（境外佛堂並寺院ノ別院支坊末庵等ノ公許ニ係ルモノ之ニ準ス）

本尊
本堂庫裏附屬建物
境內地坪並地種
境內佛堂庵室本尊並建物
一廢合　但境內地並建物處分記載
一移轉　但管轄內外區分並境內地建物及境內神社佛堂等記載
一改稱
一境外所有地ノ寄付讓與並賣買
一所在町村ノ分合
一離末本寺替

第七表

在監八死亡（明治何年自七月至十二月）　廳名

類別	未決者 男	未決者 女	已決囚 〃	已決囚 〃
第一類 傳染性病				
第二類 發育及營養的病				
第三類 皮膚及筋病				
第四類 骨及關節病				
第五類 血行器病				
第六類 神經系及五官病				
第七類 呼吸器病				
第八類 消化器病				
第九類 泌尿及生殖器病				
第十類 外傷性變死 自殺其他				
第十一類 中毒症				
第十二類 原因不詳				
合計				
第七類ノ內 肺病				

半年報

一七月 懲治者	一七月 別房留置者	一七月 携帶乳兒	計	二八月 未決者	二八月 已決囚	二八月 懲治者	二八月 別房留置者	二八月 携帶乳兒	計	三九月 未決者	三九月 已決囚	三九月 懲治者	三九月 別房留置者	三九月 携帶乳兒	計	未決者
〃〃	〃〃	〃〃		〃〃	〃〃	〃〃	〃〃	〃〃		〃〃	〃〃	〃〃	〃〃	〃〃		〃〃

十四月				十五月				十六月			
已決囚	懲治者	別房留置者	携帶乳兒	未決者	已決囚	懲治者	別房留置者	未決者	已決囚	懲治者	別房留置者	携帶乳兒	計
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人

第八表　年報

戸口表（明治何年十二月三十一日現在）

廳名

郡區名	籍人 本籍	籍人 現在戸數	合計	未決者	已決囚	懲治者	別房留置者	携帶乳兒	計
	明	女	合計	人	人	人	人	人	人

再掲市街

合計

一現住戸數ノ欄ニハ本籍ナル者ト本籍ナラサル者ト又戸主タル者ト戸主タラサル者ト

ヲ問ハス渾テ其地ニ現住シテ一世帶ヲ爲ス竈數ヲ記入スヘシ但官舍社寺學校病院製造所等ノ構内ニ居住スルモ別ニ一竈ヲナス者ハ亦一戸トシテ之ヲ記入スヘシ

一再掲市街トノ欄ニハ本籍人口一万以上アル地及本籍人ヲ本トシ次表ノ出ヲ除キ入ヲ加ヘテ現住人口凡一万以上アル地ノ本籍人並ニ現住戸數ヲ掲クヘシ但區ノ名稱アル市街ハ再掲スルニ及ハス

第九表　人口出入表（明治何年十二月三十一日現在）　廳名

郡區名	出 外國行 管外（出寄留）	出 管内（出寄留）	出 陸海軍在營監獄ニ在ル囚人（艦現役兵）	出 失踪	入 管外ヨリ入寄留	入 管内ヨリ入寄留	年報 合計	年報	再掲市街

一外國行ノ欄ニハ外國ニ行キタル者又管外ヘ出寄留ノ欄ニハ他府縣ニ出テ住スル者又管内ヘ出寄留ノ欄ニハ一府縣内ノ他郡區ニ出テ住スル者ヲ記入スヘシ但陸海軍在營艦ノ現役兵及監獄ニ在ル囚人ハ其本籍府縣ノ管内管外ニ在ルヲ問ハス各其欄ニ記入スヘシ但歸休兵ハ算入スヘカラス

一失踪ノ欄ニハ本年十二月三十一日調ノ戸籍ニ現ニ失踪ノ登記アル者ノ員數ヲ記入スヘシ

一管外ヨリ入寄留ノ欄ニハ他府縣ヨリ本郡區ニ來テ住スル者又管内ヨリ入寄留ノ欄ニハ一府縣内ノ他郡區ヨリ來テ住スル者ヲ記入スヘシ

一再掲市街ハ前表ニ掲ケタル市街ヲ云但此市街出入ノ調査ハ他府縣他郡區ノ出入寄留ヲ記載スルハ勿論同郡内ト雖モ其市街ノ域外ニ出テ住スル者ハ管内出寄留トナシ市街ノ域外ヨリ來テ住スル者ハ管内入寄留トナシテ記入スヘシ

第十表　本籍人族別表（明治何年十二月三十一日現在）　廳名

族籍	戸主 男	戸主 女	家族 男	家族 女	奉公人 男	奉公人 女	合計 男	合計 女	合計	年報 華族	年報 士族	年報 平民	年報 合計

一棄兒ハ人ノ養子女トナラサル者ノミヲ掲クヘシ

第十一表　本籍生年別人口表〔明治何年十二月三十一日現在〕　廳名

生年	男	女	計	生年	男	女	計
明治二十一年生				同十年生			
同二十年生				生年不詳			
同十九年生				合計			
同十八年生							
同十七年生							
同十六年生							
同十五年生							
同十四年生							
同十三年生							
同十二年生							
同十一年生							

一本表ハ北海道廳府縣本籍人ノ生年ヲ調査スルモノニシテ其調査ノ年ヲ首トシ以上年次ヲ逐ヒ明治慶應元治文久万延安政嘉永弘化天保文政文化享和寛政天明安永ニ溯リ年號何年生ト列記シ其生レタル年ニ從ヒ記入スヘシ例ハ明治二十一年生レノ下欄ニハ同年一月一日ヨリ十二月三十一日マテニ出生シタル者ヲ記入スルカ如シ但戸籍編製以前逃亡失踪ハ其生年詳ナラサル者アルトキ生年不詳ノ項ニ記入スヘシ

第十二表　本籍出産死亡婚姻表〔明治何年〕　廳名

類別	男	女	合計
生産 公生			
生産 私生			
生産 合計			
死亡			
結婚數			
離婚數			
年末配偶數			
附報 類別			
生産屆洩者 明治二十年生			
生産屆洩者 同十九年生			
生産屆洩者 同十八年生			
生産屆洩者 同十七年生			
生産屆洩者 同十六年以前生			
棄兒 本年生			
棄兒 前年以前生			
死亡屆洩者			
本籍不詳者死亡			
死産			

一本表ハ一箇年ノ總數ヲ記入スルノ趣意ナリ

一生産者ノ數ヲ擧クルニハ例ハ明治二十一年ニ在テハ先ツ該年ノ登記目錄ニ就キ一月